

地方と都市を結ぶホットライン・マガジン

DePOLA ^{でほら} 43

2013年



特集 I ターンして新規就農
地域に農の新しい風



Iターンして新規就農——地域に農の新しい風

●特集企画に寄せて

大鹿村/ヒマラヤの青いケシを育てる中村元夫・たか美夫婦



土別市朝日地区/濱田農園でアスパラの立茎作業をする江崎さん



下川町/一の橋コレクティブハウス

庄原市総領/草刈りをする山根匡彦さん



津南町/野沢菜の収穫作業



西和賀町/渡辺哲哉さん父子

由布市庄内/イチゴ栽培農家伊藤さん夫妻と幸野さん



今治市上浦町/山崎学・知子さん



美波町/畑を見回る岩沢康貴さん



笛吹市芦川町/川部源太・恵子さん



南会津町/トマト栽培をする宗像美由紀さん

日本列島は北から南まで、実に変化に富んだ豊かな自然と農地がある。広大で平坦な農地から生まれた粒ぞろいの作物から、斜面や山間地で露地栽培された昔風の作物まで、私たちは旬の野菜や果物、穀物を一年中味わうことができる。それは農家の人々が勤勉に、その自然と風土にあった農作物を栽培してきたからである。

しかし今まで農業を担ってきた農家は高齢化し、過疎化で若手の後継者も少ない。採算が合わないとい農家離れも続いている。休耕地が増え、里山の自然環境が悪化しはじめている。日本農業の自給率は40%以下。今のままでは沈没しかねない。

そんな状況を何とかしなければと行政や地域、農家本気で取り組みはじめたのが新規就農者の受入れ。従来のような家庭菜園的なものではなく、技術と専門性を活かした農業経営者になるべく、研修と農家での実践を経て、営農で自立していけるように指導・支援している。今回出会った農家や行政、JAの関係者は大変熱心で、地域の一員として定住してくれることを熱く望んでいる。

農業を選択した人の多くが、自然、農、食、家族等々、都市の暮らしでは得られなかったたくさんのおもしろいことを学んでいる。夜明けと共に汗して働くこと、対話しながら苗の発芽や作物の成長を見守ること、風雨や気温、土の状況、虫のこと、毎日が発見で楽しいと語る。皆とても魅力的でいい顔をしている。

さらに、農作物を独自に直売する、加工品にして付加価値をつける、自慢の野菜で新しい食を提供する等、都市暮らしで得た知恵も活かすニューファーマーたち。農山村に新しい風が吹き始めている。

特集 / Iターンして新規就農——地域に農の新しい風

●特集企画に寄せて——2



■ブランド産地 その担い手として

①担い手を育成して産地活性化

中山間地の特産品を / 大分県由布市庄内町・豊後大野市——4

②河岸段丘は命と恵みの大地

新沢菜収穫の農園へ / 新潟県津南町——8

③JAと農家で築いた「南郷トマト」50年

新規就農青年のやる気も真っ赤 / 福島県南会津町——10

④農家の心意気をニューファーマーに

農産物の一大産地 / 北海道士別市朝日地区——14



■ベジタブルライフ 農業を楽しむ

①自家製レモンで大三島リモンチェッロ

愛媛県今治市上浦町——17

②「農業をする」という人生の作り方

岩手県西和賀町——20

③地域の美味しい産直市「お山の大将」

徳島県美波町——23



■地域の環境と 暮らしを守る

①「休耕田にしない」親子で励む米作り

広島県庄原市総領町——26

②風土を活かしたむかし味「げんたのやさい」

山梨県笛吹市芦川町——28

③“美しい村”の高原を彩る「ヒマラヤの青いケシ」

長野県大鹿村——31

■自然エネルギーが地域の活性剤

森林の恵みが暮らしを支え、未来を築く

「環境未来都市しもかわ」北海道下川町——34

INFORMATION 38

- ・各県の主な新規就農者の支援事業の窓口
- ・全国過疎問題シンポジウム「2013 in ながさき」のお知らせ 39
- 編集後記 / 奥付 39

「でぼら」とは——

Depopulated Local Authorities (人口が減少した、つまり過疎化した地方自治体) からのネーミング。

過疎市町村の多くは山間地や離島など森林面積の多い農山漁村地区で、全般に人口の減少や高齢化が進んでいます。国土の保全・水源のかん養・地球の温暖化の防止などの多面的機能により、私たちの生活や経済活動に重要な役割を担っています。このような過疎地域は、豊かで貴重な自然環境に恵まれ、伝統文化や人情あふれる風土が数多く残っています。

多くの人たちが過疎地域を理解し、過疎地域と都市地域が交流をすすめ、共生していくためのホットラインとして、また過疎地域相互間の情報誌として「DePOLA」(でぼら)を発行しています。

●表紙写真

上 / バイブハウスでトマト栽培をする宗像堅固さん・美由紀さん夫妻(福島県南会津町)
下左 / 古い民家を改装して談話室に。「リモネ」の山崎学さん・知子さん夫妻(愛媛県今治市上浦町)
下右 / 学校から帰った長男・賢平君を伴って畑へ向かう渡辺哲哉さん(岩手県西和賀町)

ブランド産地
その担い手
として①



▲左から研修先の幸野道徳さん、伊藤嘉則・利子さん夫妻と収穫した「さがほのか」

中山間地の特色を活かして

取材に訪ねた日はあいにくの雨天。大分空港に出迎えてくれた大分県農山漁村・担い手支援課の黒野真伸主幹は「高速道路

は霧のため閉鎖しています」と一般道走って、由布市庄内庁舎へ案内してくれた。別府市内を抜ける道路は、山からの霧と源泉から噴出する湯けむりで視界がゼロになるほど。温泉の源泉数4471カ所、湧出量毎分29万リットルと温泉日本一(平成24年3月末現在)を誇る大分県ならではの自然状況を垣間見た気がした。「市街地から一步入ると山林や丘陵地が多い中山間地で、これらの自然条件を生かした農業が積極的に進め

会議室に由布市産業建設部農政課の首藤啓治主幹、JAおおいた由布事業部の池松大志さん、大分県中部振興局の普及指導員藤本敦子さんらが集まってくれた。

庄内地区は水稲、畜産、林産物を基幹に発展してきたが、近年はイチゴや梨、ニラ等の施設園芸が生産性を高めているという。イチゴの品種は佐賀県生まれの「さがほのか」で、比較的栽培しやすい上に、実がしっかりと甘みと酸味のバランスがよく、パック詰めしやすい形であることから、今では九州各地で栽培されている。観光地を有する由布市では特に力を入れている作物の一つだが、イチゴ農家は高齢化による離農などによって、5年前に比べて41戸が27戸に減ってしまった。

イチゴ栽培に取り組む際のポイントについて「天候など自然状況に左右されやすいため毎日の管理が大切です。そのため自宅に近い場所で栽培した方がよく、用地の確保と設備費も必要です」と首藤主幹は説明する。

市では県と連携して新規就農者を支援する農地バンク制度やハウス施設の再利用を助成する等の各種融資・助成制度を適用、また研修先農家やJAが身辺の世話から専門的指導に当たる等、きめ細かい対応に当たっている。

担い手を育成して産地活性化

●中山間地の特産品を

大分県由布市庄内町・豊後大野市

温泉日本一を誇る大分県は、山の幸・海の幸に恵まれた農林水産県。中山間地域が多く生産者の高齢化が進むなど条件は厳しいが、新しい農業の担い手を育成して地域農業を元気にしたいという県や市町村、JA、農家の取り組みで、県内に新規就農する人は昨年200人を超えた。イチゴ栽培の一翼を担う伊藤さん(由布市庄内町)、新規就農者技術指導施設「インキュベーションファーム」と、研修を経てピーマン栽培で独立する小関さん(豊後大野市)を訪ねた。

られています」と黒野さん。頂いた資料では、大分の特産品としてはシイタケ、カボスが有名だが、現在はイチゴ、トマト、ネギ類、ピーマン、ナシ、菊等々、消費者ニーズに応じた野菜や果実が各地で栽培され、福岡や関西・関東方面に出荷されている。

由布市は、観光地として知名度の高い湯布院地区と農業が盛んな庄内地区、農業に加えて商工業で活性化する挾間地区に大別され、農林業関係行政は挾間庁舎に集中している。



▲購入した住宅と敷地。家の前にイチゴハウスがある ▶庄内町の棚田が広がる美しい田園風景



農家の達人の助けを得て イチゴ栽培・伊藤さん夫妻

5年前に移住してきて、今では地域が頼りにするイチゴ栽培農家になった伊藤嘉則さん(55)、利子さん夫妻を西大都留集落の圃場に訪ねた。標高400mある高台の集落で、周辺や眼下には棚田の美しい田園風景が広がっている。自宅の前にはイチゴハウスがあり、近くに借りた育苗棟を含めて15aを栽培している。

伊藤さんは愛知県瀬戸市出身で、夫妻ともJAに勤務していた。「瀬戸市は名古屋のベツドタウンになっていて、農協勤務と言ってもずつと総務で働いていたので農業の現場は何も知らなかった。退職して農業をしたいと全国各地を歩き沖縄へも行きましたが、温泉に惹かれて平成19年11月に庄内へたどり着きました。そこで出会ったのが幸野道徳さんや熱心な市の職員で、幸野さんのお世話で田畑



▲左から県担い手支援課黒野さん、伊藤利子さん、中部振興局生産流通部藤本さん



▲育苗ハウスで伊藤嘉則さん



▲収穫したイチゴの選別・バック詰め作業が夜遅くまで続く

2反歩付の住居を購入することができました」同伴してきた伊藤さんの奥さんと母親、次女も氣にいつて背中を押してくれ、イチゴ栽培農家になることを決意、21年7月より農業をスタートさせた。

幸野さんも若い時は東京へ出たがUターンして農業を継承、イチゴ栽培では15年のキャリアを持つ達人だ。「伊藤さんは農協にいたと聞いたから期待したが、何も知らない。息子のつもりでよくしごきました。でも素直で熱心で、奥さん共々向学心があって、一年間ほどの研修で、自分の農地でも栽培できるほどに上達した」と幸野さんは楽しそうに語る。「窒素もリン酸も知らないありさまで。ハウスの設置、土作り、苗の育成、学ぶことは山のようにあった。幸野さんからは農業の基本を叩きこまれ、JAや県の指導員の方には新しい設備や資金融資のこと等でお世話になりました」と伊藤さん。

当初は土耕栽培から始めたが、その後作業しやすい高設栽培に切り替えた。

6月に入るとそろそろ収穫は終了するというのが、ハウス内ではイチゴは生き生きと葉を広げ、まだまだ次々と実をつけている。そ

のためあと数日は一日40〜50バック収穫するそうだが、そのあとハウスは太陽熱で消毒し、秋から新しい苗を植栽する。

いつも作業を支えてくれる利子さんの功績も大きい。

「年末はイチゴが高価で取引されますが、ムリをせず2、3月が最盛期。一番多い時は一日300バックを出荷します。品質を厳選して3LからSまで5種に分けてバック詰めしフィルムをかける。夜10時頃までかかり、主人が一番嫌がる作業です」と利子さん。バックしたイチゴは一晚5〜6度の低温庫で冷やして翌朝出荷するという。

地元産の穀物や新鮮野菜でパンや菓子を作るのが夢だったという利子さんは、作る暇がないとぼやきながらも、余ったイチゴでムースやジャムを作り、パンを焼くと幸野さんらお世話になっている農家へ配る。

近くにある育苗ハウスへも案内してもらった。隣接して幸野さんのハウスがある。「最初は苗は農協から買うものと思っていました。全部自分で用意しなければならず、10aで8000本近く必要なんです」

手間がかかり手抜きが出来ないイチゴ栽培新規就農でよく挑戦したと感心するが、伊藤さんは「それだけやりがいがあり、収入面でもほぼ満足できます」と爽やかに微笑んだ。帰路の折、大分市にある大分県農業農村振興公社の佐野幹夫さんを訪ねた。就農する人



▲就農者の支援、相談に当たる佐野幹夫相談専門員

●大分県農林水産部 農山漁村・担い手支援課 ☎097-506-3586
●公益社団法人大分県農業農村振興公社 ☎097-535-0400
●大分県由布市産業建設部農政課 ☎097-583-1111



◀インキュベーションで研修中の堀さん、持田さん姉妹(上段)指導に当たる三代さん、長谷川さん

の相談・支援をする専門職で、伊藤さんの就農支援にも携わった。「就農に関する窓口は沢山ありますが、まず何をしたいか、資金はどうか等を聞いて、その人に合った窓口を紹介したりアドバイスをします。本気で農業をやる気があるかを見極めることが大切で、伊藤さんに会った時、彼ならイチゴ栽培が出来ると確信しました。支援制度もいろいろありますが、原則として資金は貸し出すもので返済が必要。研修期間中に年間150万円受け取れる給付金制度も用意されているが物質的な支援はしない。農業で自立するという覚悟を持ってもらうためです。結局は人ですね」と穏やかに語った。

大分県では昨年度、I・Uターンを入れて221名が新規に就農した。平成27年度までの5年間で1000名をめざしており、佐野さんのような適切でかつ人間味豊かな相談員が存在が求められそうだ。

選ばれた6組12名が研修中 インキュベーションファーム

翌日は大分県西南部に位置する豊後大野市へ。大野川周辺は豊かな水利を生かした水田地帯、丘陵地は県内屈指の基盤整備した畑作地帯で、その面積は県下でもトップクラスの規模を持つ。最近では施設栽培によるピーマン、菊等の生産地として注目され、特に夏秋ピーマンの生産は全国で一二を誇る。

しかし担い手の高齢化と認定農業者の減少、後継者不足等により、生産額の減少と地域の活力低下を招いてきた。基幹産業である農業と地域を担う若い農業企業者を育成することが急務と、市が平成22年から単独事業で始めたのが「インキュベーションファーム」事業。ブランドとして高い評価を受けているピーマンは経営の安定した作物であり、それを新規就農者の中心品目に定め、新しい就農者を確保し育成している。全国から募集した就農希望者(昨年は18組応募)に短期体験研修をしてもらい、その中から毎年3組6名を採用して2年間研修し、ピーマン農家として独立してもらう制度である。そのために、2LDK・6世帯用の宿泊施設を市内に新設、大野町大原には研修ハウス67・5aをはじめ、研修圃場7040㎡を設置、総事業費3776万円は備品や資材整備、活動支援費(24年度)に当てた。

インキュベーションとは「孵化」の意味で、ゼロから育てて農業者として立派に孵化させること。農業経営は一人では難しいので夫婦か家族二人が揃い研修を受けることが条件だ。

同ファームで孵化した第一期生小関之浩さん(ゆきひろ)夫妻はすでに独立、ファームには神戸市からIターンしてきた堀彰太さん(38)と福岡市からきた双子の姉妹・持田由美子さん(31)、美千代さんが作業。指導にはピーマン農家で農業公社職員の三代重吉さんが当たっていた。堀さん、持田さんは今年12月で2年間の研修を修了して独立することになる。別の農地では今年1月に研修を始めた4組の研修生が作業中とのことだった。



▲ファーム内のピーマンハウス
▼手前左/豊後大野市農業振興課有光宏之事務局長、右/山津輝芳主任 上左/県豊肥振興局平山俊一さん、右/農山漁村・担い手支援課生野栄城主幹



▲ファームで収穫されたピーマン。ランク別に4段階に分けて出荷する



▲インキュベーションファームの研修棟

●豊後大野市農政振興課担い手支援係
☎097-422-1001

▶鉄骨の組み立てに苦労したという
倉庫兼休憩所で、小関さん夫妻



研修生は各自が15aのピーマンを栽培しており、持田由美子さんは「小さい頃から憧れていた農業の夢がかなえられそうです。一年目のビニールハウスの建設は、ちよつときつかったけど、今年は大型トラックの免許も取得し、やる気満々です」。妹の美千代さんは「もし結婚しても姉とは一緒に農園経営をしたい。覚悟で、自立したら福岡にいる両親も呼びたい」と言い、二人の日焼けした笑顔は爽やかで頼もしい。

堀さんの奥さんは間もなく出産の予定で、産休中だった。ファームから誕生する初めての二世として皆が期待している。日差しが刺すように暑いビニールハウスの

中ではピーマンが熱帯植物のように色濃い葉を広げ、沢山の実を付けている。スーパーでは見たことがないような肉厚の艶やかな実である。広大なハウス群では出荷時期に合わせて育苗時期をずらし、収穫したピーマンは大ききや形に応じて4種にランク分けし、低温保存庫で一日保管したあと出荷される。

収量を上げるのが課題 ピーマン栽培・小関さん夫妻

研修1年で独立し、現在12aのハウスでピーマン栽培をする小関之浩さん(50)、憲子さん(44)夫妻。まず最初に自分たちで建てたというテントの中で休憩して話を聞かせてくれた。福岡県筑紫野市出身の元公務員。「定年後には農業をしたいと思っていたところにチャンスをもたらした。多少の農業経験と年齢的な点を考慮して1年の研修を終えて独立させてもらいました。ピーマンはそれほど難しい作物ではないので研修後は誰でも作れると思いますが、品質のいいものを安定的に収量アップしていくことが課題です。部会が昨年まとめた収量は平均10tと言われています。私は反当たり15t以上を目標にしたいと思いますが、結構むずかしいですね」と小関さん。ファームでは15t生産する優等生だった小関さんだが、農地の違いや害虫(蛾)の発生等もあり、自分の農地での安定経営までには時間がかかりそうだ。農業大好きな憲子さんの「研修生のつもりで頑張りすぎないで」という大らかな後押しが救いだとか。JAのピーマン専門指導員や農業公社の支援係の人もよく訪ねてくれ、この日は県の普及指導員の太坪さ

んから病害虫防除についてアドバイスを受けていた。自宅はクルマで10分ほどにある谷沿いの集落。手入れされた庭と納屋もある比較的新しい空家を、ひと月2万円で借りている。「朝4時に起きて朝食を作り家内を起こします。すっかり生活パターンが変わり体調がよくなりました」という小関さんに、留守番をしていた愛犬が嬉しそうに抱きついてきた。

文／浅井登美子 写真／満田美樹

◀40℃近いハウス内で収穫作業をする小関さん夫妻
▼県の指導員のアドバイスに真剣そのもの



◀借用している一戸建て住宅の庭で



▲名水百選に指定されている竜ヶ窪の森と湖

河岸段丘は命と恵みの大地

●野沢菜収穫の農園へ——新潟県津南町つなんまち

長野県に隣接する津南町は、千曲川が信濃川に名前を変えるところ。信濃川に合流する3河川により9段もの河岸段丘が形成され、その規模は日本一。段丘は開拓事業により機械化農業が進み、水稲をはじめ、蕎麦、大豆、花卉・球根、スイートコーン、アスパラ等、全国有数の栽培地になっている。豪雪の中で冬を越す「雪下人参」、雪解けを待つて芽吹く春アスパラ。そして7月には標高の番高い地区で野菜の収穫が最盛期を迎える。女性群に交じって働く新規就農2年目の青年が頑張っていた。

苗場山麓 龍神の森プロジェクト

津南町役場地域振興課の小林正秀農林班長と樋口将洋主事から頂いた名刺は美しいカラ―写真入りで、「苗場山麓 龍神の森プロジェクト

クト」と印刷されている。

世界でも有数の豪雪地帯である津南町は湯沢町、長野県栄村と組んで「雪と水の恵み」をテーマに活動。

山村の水土保全機能の維持と、その水がもたらす電力、農作物等が都市部で消費されていることから、山村と都市が連携して循環型森林整備をおこない、「雪国が100年後も雪国である」ための環境を次世代に伝えようとしている。温室効果ガス排出削減に向けてカーボンオフセット制



度を企業等に導入してもらい、それで山林の保全整備や地域の活性化事業を充足するもので、新潟県が平成22年に全国で初めて「国のプログラム認定」を受けた。津南町の竜神の森プロジェクトは、町と森林組合、NPO法人「GO雪共和国」が協力して取り組んでいる。

さて、津南町の農家数を平成2年から20年後の22年で比較してみると、全体では2175戸から1710戸に減少しているが、5〜15haを耕作する大規模農家や自給的農家はかなり増えており、品目では魚沼産コシヒカリを生産する農家が圧倒的に多い。ほとんどの農家が有機栽培、減農薬栽培に取り組んでいる。畑作ではかつて盛んに栽培されていた葉タバコが年々減り、代わってアスパラガスや人参、大豆、キャベツ等の高原野菜の生産が増えている。他に県営妙法牧場、町営高野山牧場等があり畜産も盛んで、現在豚牛飼育農家は21戸ある。

気になる新規就農者については、「平成6年から現在までに25名のIターン者がいます。Uターンする人もかなりいます。しかし豪雪地帯の津南では12月から4カ月ほどは雪のために働けない。逆に、スキー場等の仕事を楽しみに移住してくる人もいます」と樋口さんは言う。

町内には農業公社が管理する新規就農者の技術習得施設とファームハイツがあり、現在新規就農した夫婦家族4世帯、単身者8名が入居している。

雪は多い年で3〜4m、平成18年には最深積雪416cmを記録したというが、草花や植木のある民家や緑が美しい水田地帯を見ると、こ

▲左/津南町夏の風物詩「ひまわり広場」。あと2週間ほどで広場は真っ黄色になる
中/竜ヶ窪の森で見つけたモリアオガエルとアマガエル
右/北海道を思わせる河岸段丘の畑
◀新規就農家族らが入所するファームハイツ



こが豪雪地帯であるとは信じられないほどだ。

野沢菜収穫は夜明けから

樋口さんの案内で野沢菜を収穫する相吉山地区を訪ねた。段丘畑の中では最も標高が高い場所、12戸が栽培しているという。信州・上越地方の人気漬物ナンバーワンで、葉物の中では50cm以上と背丈が高く、茎に旨味が凝縮している。雪解けを待って種蒔きした菜は夏秋用にシャキッとした浅漬けに、晩秋に収穫する菜はよく漬けて濃い味わいに仕上げる。金子農園の野沢菜園は約7haある。摘み取り作業は、夜明けの朝霧が立ち込め、菜の葉がシャキーンとしている頃から始まり、午後は早目に終了する。

6人ほどの女性が摘み取り作業をしていて、唯一の若者小杉拓生さん(27)は、主としてその菜を集めて束ねる作業。無農薬で育成した菜はその場できれいに整えて、根元に漬けやすく歯を入れ、一束5・5kgずつを機械で束ねる。「この時期に収穫できる野沢菜はここ津南しかない。甘みと特有の香りがある最高級品です」と小杉さんは言う。

小杉さんを見附市出身。長岡市のレストランで働いていたが、二年前に農業をしたいと移住を決意した。穏やかなハンサム青年は皆から愛されているようだ。

束ねた菜をトラック一杯に載せてJAや漬物店へ届ける準備をしていた金子正規社長(47)は、「結構力がある仕事なので小杉君のような若者がいると助かります」と語る。

金子さんも若い時はサラリーマンだったが、農業を継いだ長男が死去したため、次男の金

子さんがUターンし、数年前から野沢菜栽培を始めた。相吉山の土地は広大だが、借地代や水利代が必要で、効率よく栽培・加工出来るかが課題だという。金子さんの奥さんトウイさんはジャワ島出身の人気者。地元の高齢者らと和気あいあいの雰囲気で作業が続く。冬はスキー場のリフトマンをする小杉さんは「スキーには全国から人が来るので、それも楽しみです」と言っていた。

市街地に近い沖の原台地では、夏の風物詩「ひまわり広場」のヒマワリが開花期を迎えていた。4haある広大なひまわり畑で、町と住民ボランティアが育てている。

昨日も一日草取りをしたと言う樋口さんは、一部の畑ですでに花が咲き始めてしまったことを心配していた。畑には迷路が作られ、7月末の日曜日には男女20名が参加して出合いのパーティが開かれ、結婚式も。8月は地元食材を試食できるテント村が土日に設けられ、首都圏からの観光客も多い。

取材の後、日本名水百選の一つでブナ原生林のある竜ヶ窪へ行って神秘的な湖畔を散策した後、113万坪の敷地を持つ高原リゾートホテル「ニューグリーンピア津南」へ。宿泊し体験学習する青少年で賑わっていた。

広大な段丘は多様な顔を有し、苗場山と大湿原、三つの湖、ブナ林、山菜の森等の豊かで貴重な自然の宝庫。



◀小杉拓生さん。農業に関心のある彼女またはお嫁さんを募集中です!
▶金子農園・金子正規社長(右)と小杉さん。束ねた菜はトラックに積んで漬物会社へ
▼早朝から始まった菜摘み作業。中央がトウイさん



町では植物や生き物を観察できるマップ「自然観察園・津南」を作成し、日本一の河岸段丘の魅力をアピールしている。

文／横田搭美 写真／小林恵



▼南郷トマトを使ったソフトクリーム、
ラーメン、ジュース(道の駅「きらら」)



「赤くて硬く
て美味しいト

JAと農家で築いた「南郷トマト」50年

●新規就農青年のやる気も真っ赤——
福島県南会津町みなみあいづまち

「マト」として東京青果市場でも圧倒的な人気を誇る南郷トマト。夏秋トマトの生産地として全国屈指で、南郷トマト生産組合員は南郷地区を中心に、館岩・伊南・只見・田島下郷地区に119名。良質なトマトを安定的に生産するという農家とJAの「熱い想い」が結実し、平成18年に地域団体商標に認定登録された。昭和37年に14戸の旧南郷村農家が「始めたら10年は続けよう」とトマト研究会を立ち上げて栽培を始めて50年、豪雪や豪雨等の災害を乗り越えながら地域の発展と消費者との信頼を深めてきた。新規就農をめざす若者も多い。

7月~11月、選果場はフル操業

南会津町南郷総合支所のある市街地から3km程北へ行った宮床地区に、南郷トマトの共同選果場がある。平成15年に事業の拡大に伴い改修された選果場は、敷地が約7000㎡、最新機能を搭載して設置された施設は延床面積が4310㎡と広大である。

今年の特産物の出荷は一週間前の7月9日から始まったばかりで、「まだ試運転段階」と係の男性は言っていたが、各農家から運び込まれた青味の残るトマトが荷受けコンベアに沢山並んでいる。ラインに乗ったトマトはま



▲素早く等級別に分けていく「手選部」の女性たち

◀自動箱詰めをするロボットパライザー
▼機械が等級別に箱詰めしていく



ず女性たちの厳しい鑑識眼で「手選別」されて一個一個がトレイに乗り、続いて光センサーで内部と外部の品質が科学的に選別される。機械が4つの等級とさらに大きさや色・形ごとに細かく分け、ランクごとに美しく自動箱詰めされ、梱包される。このあと、箱詰めされたトマトは「雪室予冷」といって、雪の冷気を活用した貯蔵室で一晩冷やされてから出荷される。

ここで働く人たちは、出荷されてきたトマトを車から降ろして荷受け台に乗せる男性たち、手選別する女性たち約30名を中心に平均で約60名というから、かなり機械化が図られ



ている。しかし最盛期には早朝から夜10時頃まで選果作業が行われるため、地域住民にとって大切な雇用の場になっているようだ。

選果場入口にあるJA会津みなみ営農部事務所では10数名の職員がパソコンに向かっていた。農家の出荷量とその品質状況はパソコンに記録され、直ちに事務所のコンピュータに入力され、農家にも送信される。出荷情報は、東京等の市場や取引先にも提供されるため、事前に正確な情報が得られると市場関係者から信頼されているという。

これらの作業を管理する営農課長の星晴博さんを訪ねた。次々と入ってくる電話応対で忙しく、事務所は南郷トマトの出荷シーズンを迎えて活気と緊張感があふれている。「ここではまだトマトは赤くないんですね」という我々の素人発言に、星課長は「トマト

の色は赤くはありませんが、糖度も酸味もあり熟しています。南会津特有の気候と標高の高さ、昼夜の気温差が、良質な味と品質を生んでいます。グルタミンの含有料も高いんですよ」と、その特色を語る。

確かに、あとで頂いたトマトは味が濃く太陽の香りがして果物を食べているようだった。



▲南郷トマトの魅力語る星晴博営農課課長

品種は桃太郎。糖度、酸味、甘さとのバランスがよく、夏秋トマトとしては、南郷が全国的にも有数の産地を誇っているという。

品種を替え、風雪をプラスに ——50年の努力

「トマトの生産研究会が出来てから昨年50周年を迎えました。選果場は現在のものが四代目、機能的にも最先端を誇っています」と、星さんは『南郷トマト50年の記録』という冊子をくれた。それによれば、昭和37年に旧南郷村の14戸の農家がトマト研究会を立ち上げ、「始めたら10年は続けよう」と50aで栽培を始めた。「品質は日本一だが量の少なさは世界一」と東京の市場で言われ、価格も安く、リヤカーで村内を売り歩いたこともあったと記されている。しかし

水田の転作もあり、周辺町村でも栽培する人が出てきて、昭和49年には南郷トマト生産組合が町村を超えて結成され、売り上げは一億円の大台を突破した。選果場も2カ所に出来、生産農家も耕作面積も年々増えていった。この頃はアンブレラ栽培（傘をさす）が本格的に始まっていたが、毎年のように霜害、大雪、低温、長雨、日照不足で、栽培に影響を与え



ていた。研究を重ねて何度か品種を変えてきたが、昭和62年から完熟系「桃太郎」品種に更新、安定出荷のためパイプハウスの導入に踏み切った。2mを超える豪雪地帯であるため、ハウスの倒壊も多く、苦労は絶えなかつたが、ハウス周辺の雪を踏み固める工夫をした。やっかいな雪だが、病害虫の発生を抑えて土壌を再生する効果もある。雪をプラスに替えて自然と共生する農法が各所に活かされている。

「平成に入り、パイプハウスで桃太郎を栽培するようになってから販売額は大幅に増えてきました。青年部が新技術の開発を担ったことから、新規栽培者の育成にも力を入れているようになり、産地拡大をはかってきました」と星課長は言う。

上／伊南川はアユやヤマメ、イワナが棲み釣り人に人気
下／川沿いにはトマト栽培のハウスが並び、清流が豊富に配水されている

トマト以外の栽培予定について聞くと、「トマトに特化した生産地です。だからトマトひと筋で品質のいいものを安定的に量産するよいう生産者には指導しています。トマトの樹は1〜12段くらいまで実がなるため、きちん与管理すれば一段目がダメでも二段、三段目と実を成らせることが出来るので、新規就農者でもやっていけます。出荷できないトマトはジュースに加工し、年間60万缶製造していますが、早目に売り切れてしまいます」

加工は長野の工場に委託しているが、地元でしか買えない人気のトマトジュース缶である。

収量を増やして安定経営を目指します 就農3年目の宗像さん夫妻

南郷地区は中央を伊南川が滔々と流れ、アユ釣りを楽しむ人もちらほら。川沿いは新緑の稲穂が美しい水田地帯だが、所々にビニールハウスが点在する。その一つのハウスを訪ねた。新規就農して3年目の宗像堅固さん(35)と奥さんの美由紀さん(36)が栽培する12棟22aのハウスで、トマト栽培をしている。ハウスは雨を防ぐため屋根はビニールで囲っているが、側面は防虫ネットを張って自然の気温や風を取り入れている。道路に立つと川風が心地いいが、訪ねた日のハウスの気温は優に35度を超えている。

宗像さんは大手メーカーより受注する半導体の会社に勤めていて、会津若松の支社に転職になった。そこで美由紀さんと知り合って職場結婚、南郷スキー場を知ったのもその時だった。

「南郷スキー場が大好きで10年以上通っていました。その後会社は富山に転勤になりましたが、スキーで毎冬南郷に来ていました。しかし会社はリーマンショックの影響で仕事が減りはじめた。スキー場で『もう仕事がなくなくなるかもしれない』と言っていたら、『ここへきてトマトを作ってみないか』と言う人がいた。酒井喜憲さん(67)でした」

6年前のこと。二人の子供がいたが、会社を辞めて南郷へ移住することを決意した。住まいは町中に空き家を借りることが出来、研修中も町や県より助成金が出たため心配しなかったと言う。酒井さんのトマト農園で2年間研修して、3年目に酒井さんの農場の隣の農地を借りて独立した。

パイプハウスの建設は重労働だったが、農園には週2回県やJAの指導員が来てくれた。土の素性を知ること、その日の気候や気温を把握すること等、沢山のことを学んだと言う。喜多方市の出身の美由紀さんは新規就農に賛成、子供が2歳になってからは保育所に預けて酒井さんの農園で1年間研修した。堅固さんにとってたくましい相棒となっている。

いま子供たちは長男が小学2年、下の長女

が保育所年長さんになったが、夫妻の作業は夜までかかることがあるため、昨年より町に交渉して午後7時まで開校する学童保育制度を実現させた。17人の児童が利用しているという。

住居は、当初の借家から民宿を営んでいた広くて手入れのよい家を借りることができた。「新規就農したい人が多い割には空き家情報不足している。不在でも貸さない人が多いようで、私は幸運でした」と宗像さん。

宗像さんの明るくて率直な人柄が皆から愛され、地域にも風穴を開けているようだ。

「私の作るトマトは、私に似て大きめで形も悪いのが多く、階級的には下の方ですが、嬉



▶午後の作業を開始する宗像さん夫妻



▲一本の木に4,5個実を残して、他はカットする
▶芽摘み作業をする美由紀さん



苗木の接ぎ木、芽かき等々、専門的な話をいろいろ聞くことができた。また宗像さんは「最近では農家が消費者に直売したりインターネット販売をするケースが増えており、二級品や余りものを販売するケースもある。出来るならその時間を生産の向上に向けてることが大切だと思います」とも語っていた。

南郷トマトは生産者とJA 一体による生産

しいのは、どんなトマトを作っても農協が全部買い取ってくれて、生産に専念できることです。夫婦で20aは少ないのもっと農地を拡大したらというアドバイスもありますが、施設管理が大変なので、品質を上げ単収を上げる工夫をしています」

肥料やホルモン処理、

向上の努力と厳しい検査を経たものが「南郷トマト」のラベルを有することが出来る。農家の責任感と自負・誇りが、ブランド品を生み輝かせていることを、若い就農者から改めて学ぶことができた。

若い就農実習生たちにも人気

スキー場で宗像さんをトマト栽培に誘った酒井喜憲さんの農園へ宗像さん夫妻が案内してくれた。組合員の中でも栽培規模はトップクラスで、広いハウスが30棟ほど建っている。肝心の酒井社長は健康診断で留守だったが、新規就農でインターンした実習生が3、4人いて、汗だくになりながら芽かき作業やホルモン処理を行っている。ホルモン処理とは、開花した花を蜂で受粉させるのではなく、水に薄めた微量のホルモン剤で結実させる方法。蜂の方が良質の実になるようだが、暑くなる

と蜂の働きが不安定になるといふ。午後3時になり、全員が休憩所に集合した。長年働いている年配者から今年研修にきた若者まで、冷たい飲み物を飲みながら話がはずむ。

「これから忙しくなるので、夏休みもお盆もありませんが、11月から4月までは休める。ここにおいてスキーを目いっぱいするのが楽しみです」と斎藤吉朗さん。栃木から来て4年目、そろそろ独立を検討している。

古澤真之介さんは東京から来て間もないが「面白い、いい仲間と知り合えたので、ここで働くのも魅力的ですが、やはり宗像さんのように独立をめざします」と言う。

ほとんどの実習生が「将来は独立したい」

と答え、「でもまず彼女を見つけて一緒に働ける奥さんが必要だね」と爆笑となった。皆から羨望を受けて、照れながらあわてて引き上げる宗像さん夫妻。これから4カ月間、毎日欠かさずトマトを出荷する日が待っている。

なお、道の駅「きらら」では南郷トマトを使ったソフトクリーム、ラーメン、ジャム等があり、トマトの酸味の効いたピリ辛ラーメンは夏にぴったりの感じであった。

文／浅井登美子
写真／小林恵

▼酒井農園で実習する斎藤さん、古澤さん



▲午後3時の休憩タイム。遮光テントの中は意外と涼しい

農家の心意気をニューファーマーに

●農産物の一大産地——北海道士別市朝日地区

天塩川沿いに広がる肥沃な大地は、良質な米、麦、馬鈴しょ、豆類、野菜等を生産する一大食糧基地。その最上流域に位置するのが朝日地区で、元氣な農家の皆さんが協力して新規就農する若者たちへの研修指導に取り組んでいる。すでに研修を終えて8.6haの畑で大豆等の栽培に当たる中村光晶さん、今春家族で移住してきて研修農家の畑で実習する江崎浩之さんを訪ねた。

中山間地の特性を活かした農産物

士別市は北海道北部に位置し、北海道第二の大河天塩川の豊かな水と森、肥沃な大地に恵まれている。平成17年に士別市と合併した旧朝日町（人口1527人）は天塩川の上流

にあり、川沿いに農地が広がる中山間地区で、地域の特性を活かして多彩な農産物が生産されている。真冬はマイナス30度近くになり、雪も1〜2m積もるといだが、7月になったばかりなのにその日の温度は30度もある。

士別市朝日総合支所経済建設課の多羽田さんは「北海道の中でも中山間地域に当たり、この内陸性気候や気温差が、食味の良い様々な農産物を育てるのに適しています。加えて農家は、高品質で安全安心な農作物づくりに大変熱心な地区です」と言う。頂いた「士別市あさひ集落中山間地域等直接支払交付金事業」という資料によると、鹿被害対策、水路や農道草刈り、もみ殻収集や堆肥散布等の農業生産活動を事業化して協同で取り組み、さらに23年度から新規就農対策事業もスタートした。

これらの事業は中山間地域等直接支払交付金で行われ、新規就農対策事業では士別市担い手支援協議会との連携により、現在6軒の受入れ農家が就農希望者の指導に当たっている。大型免許等の各免許取得助成制度もある。

新規就農者の育成の他に、Uターンして農業を後継する人への支援策もあり、都市女性を対象にした短期農業体験等も予定されている。多羽田さんの案内で、江崎浩之さん(38)が研修する濱田農場を訪ねた。

家族との時間を増やしたい 研修一年生・江崎さん

幹線道路から入った山沿いに濱田義幸さんが営農する畑があった。アスパラ栽培のハウスが6棟建ち、その先には大豆や秋小麦等が栽培されていて、休憩用のプレハブ等もある。

早目に来た江崎さんは自分のクルマのドアを開けて待っていてくれた。大工の棟梁として札幌市内で工務店を経営する若手凄腕経営者だったと聞いています。

その人がなぜ農業を？

「子供たちとの暮らしを大事にしたいから」と江崎さんは言葉少なめに言う。江崎さんに



▶朝日地区には岩尾内湖や天塩岳があり、カヌー・釣り・登山など、アウトドアの人気のスポットでもある



◀アスパラの立茎作業をする江崎浩之さん



▶濱田農場に早目に来たクルマで待つ江崎さん。白焼けして腕が真っ黒だ



▼アスパラの立茎作業



▶濱田さんは猟友会朝日支部のリーダーとして鹿駆除等に当たる

▶濱田さん夫妻と江崎さん

は4人の子供がいて、長男樹里也君(5)、二男末里耶君(4)、長女世里那ちゃん(3)に次いで最近三男希里斗君が誕生したばかり。奥さんは出産のため札幌の実家へ子供たちと帰っていた。(取材一週間後には元気で戻ってきた)多羽田さんが写真を撮って送ってくれた

「農業をしたいと道内各地を見て回っていましたが、北海道農業公社の就農アドバイザーの宮下さんから土別市朝日地区を紹介されたんです。見に来た時はまだ雪が残っていましたが、ここでは農産物をいろいろ栽培し、酪農家も木工家もいる。自分もここでやっていきたい、楽しそうだと思います。案内してくれた農業改良普及センターや市役所、農家の方の対応もとても良かったです」と江崎さんは言う。

住まいは廃校になった登和里小学校に建つ旧教員住宅。グラウンドは子ども達の絶好の遊び場だ。

ここは人気の「ゆめぴりか」「おぼろづき」等のお米を生産する稲作農家のほか、畑作農

家が多い。畑作農家は小麦・大豆・甜菜・馬鈴しょ・野菜・緑肥作物等を輪作して、連作障害を防いでいる。

間もなく濱田農場の濱田義幸さんと奥さんの登美枝さんがやってきて、アスパラ施設での作業がはじまった。グリーンとホワイトアスパラを栽培しているが、すでに春用は出荷を終えており、今日は育った葉を整える立茎作業だと言う。植栽して4、5年目の苗木は無数の葉を広げている。その上の方に伸びた葉先や枝をカットすることで、地中に栄養を与えて次の新芽が出る。その新芽は翌春にはアスパラとして採取できる。

用意してくれた剪定鋏を使って、江崎さんは登美枝さんの手さばきを真似ながら葉を落としていく。「何でも一生懸命学ぼうとする頼もしい青年だね。息子が一人増えたよう嬉しうよ」と登美枝さん。

濱田さんの家でも長男がUターンして農業を手伝っているが、今日は親戚の酪農家の手伝いに出かけているとのこと。

別の作業をしていたご主人の義幸さんが、道路に立ちピーヒョロと叫びながら空に向かって手を上げはじめた。二羽のトンビが空を旋回していたが、やがてそのうちの一羽・親友のピーコが近付いてきて、濱田さんの手から鶏肉片を取ると、また空に向かって飛び立った。近付きながら盛んに鳴いてラブコールし、肉を貰ったあともゆっくり旋回して挨拶する。

「鹿駆除をしているので、その肉をやるんです。畑作業していても近くへ降りて来てピーピーと毎日挨拶するんですよ」と顔がほころぶ。

山に近いため鹿の被害が深刻で、濱田さんは11人の猟友会メンバーと年間500頭以上の鹿を駆除している。畑には鹿侵入防止用の電気柵を張っているため被害は少なくなりましたが、夜には狐や狸が徘徊しているようだ。

●土別市朝日総合支所経済建設課 ☎0165-28-2121



▲江崎さん一家。廃校になった登和里小学校の前で(撮影/多羽田 司氏)

▼▶広大な畑で大豆を栽培、消毒に当たる中村さん



中村さんの研修ぶりが農家の心を打った

幹線道路に面した登和里地区の大豆畑では、中村光晶さん(47)が消毒作業をしていた。厳しく規定された低農薬を機械を使って噴射していく。作業の手を休めて道路脇に来てくれた。神奈川県藤沢市の出身で、埼玉と藤沢で、機械関係の下請け製造を行っていたが、5年前に朝日地区にIターンして就農研修を受けた。

「長い間農業に憧れていました。父は札幌出

身で教師をしていて帯広畜産大学で教えたこともあり、北海道で農業をするのが僕の夢でした。20代には食料を輸入する仕事もやっていて、世の中で一番大切な仕事は農業だと思っていました。最初は関東のどこかでと思いました。データ等で調べると北海道が抜群。そこで農業公社を通じて朝日地区を紹介されたのです。農家の人たちが誇りと夢をもって楽しみながら働いて

おり、とても勉強になります」

施設トマトと畑作を経営する農家岡田正悟さんのところで2年間実習していたが、その様子をみていた隣家の農家の主人が「彼なら農地を譲ってもいい」と、農地と家を手放す決意をした。

家は手入れされたモダンな2階建て家屋のほか納屋が4棟あり、庭には木々や草花が茂っている。購入出来たマイホームは、奥さんの初美さん(36)も二人の子供も大変気に入っている。一昨年より初美さんのお母さんも同居し、家事をサポートしてくれる。

家のそばにあるビニールハウスではトマトがなり、初美さんが作業をしていた。「北海道で農業すると主人から聞いた時はちょっと驚きましたが、何事もきちんと決めてやる人なので反対しませんでした。皆さんに感謝しながら、私も主人を助けていかなうてはいけないと修業中です」

学校から帰ってきて畑に来た長男光汰君

(小2)は「冬は寒いけどスキーが出来るから好きだよ」と言う。町内唯一の糸魚小学校の小学2年生は11人だが、学校はとても楽しいと光汰君。

家屋敷の周辺に広がる農地は8・6haあり、いまは賃貸契約で中村さんが耕作しているが、数年後には中村さんが購入することになる。

新規就農の研修生を受け入れている畑作・トマト栽培等の大規模農家・岡田正悟さんは、「中村さんには3年間働いてもらったが、とても熱心で、この地区の農業の担い手として期待できます。毎年一人はこのような若者を受入れていきたいですね」と語る。

岡田家でも息子さんが後継者として就農しており、現在は農協青年部の朝日地区代表として地域活動にも取り組んでいる。

畑からいできたばかりのトマトをいただいたが、その味は太陽の匂いと果物のような甘さに溢れて、とても美味だった。

文／浅井登美子

写真／小林恵



▶中村さん一家が住む住宅の前で



▲新規就農者の農業指導に当たる岡田正悟さん。後方は広大なビート畑

自家製レモンで大三島リモンチェット

いまばりしらかみうらちよう
愛媛県今治市上浦町

東京から大三島に移住して無農薬のレモンや八朔等を栽培、それで念願の国産リモンチェット

(リキュール)や各種ソースの製造販売を実現した山崎学・知子さん夫妻。民家を改装してオープンしたショップ「リモーネ」は、二人の夢と汗の玉手箱。最近はずを聞いて遠くから訪ねてくる客も増えてきた。学さんは朝早くから点にする柑橘畑へ作業に出かけ、知子さんはジュースやソース等の仕込み作業に追われる。

苦労も多かったが、そのプロセスも、楽しい田舎暮らしに変えて完成したリモンチェットには、大三島の自然と夫妻の愛情が詰まった豊饒な味わいに溢れている。

夢のショップ「リモーネ」

尾道市から新尾道大橋を渡って6つの島を渡ると四国今治へ着く。瀬戸内しまなみ海道の高速度を走れば1時間という便利さだ。大三島はしまなみ海道の島々のほぼ真ん中であり、最も広い面積を持つ島。西部には全国に約1万社の分社を持つ鎮守の総社・大山祇神社があることで知られる。尾道から約40分、島東部にある大三島ICを降りると、道の駅「多々羅しまなみ公園」の広場があり、埠頭からは紺碧の海とその先に広がる島々が一望できる。南国風な明るい太陽と潮風の匂いに、瀬戸内海の島に降り立ったことを実感する。



▲レモン100%のレモネードと採れたてのレモン

11年前は酒屋だったという小さい民家。改装した20畳ほどのスペースにはテーブルや棚を配して、知子さん手作りのジュースやジャム、酒類を中心に、イタリアやタイから仕入れたキッチン小物・器等がところ狭しと並び、玉手箱のよう。この玉手箱が他と違うのは、知子さんの料理家としての腕前とセンスが集積されていること。特に、山崎夫妻が移住を決意する動機となったレモンの栽培が実を結んで、自家製リモンチェット(リキュール)を完成、そのクリスタルな容器が彩を放っている。リキュールにはレモンとネーブルを使った2種があり、他に添加物ゼロの濃縮ジュースや新作のレモンパイ等もある。

レモンも八朔もいまは学さんが栽培したものを加工しているが、元は地元で農家が育てた木。だから「リモーネ」では、大三島産と銘打って販売している。地区の主婦は「都会にいる子供に自慢して持っていきける一番の土産だわね」と自慢げに言う。

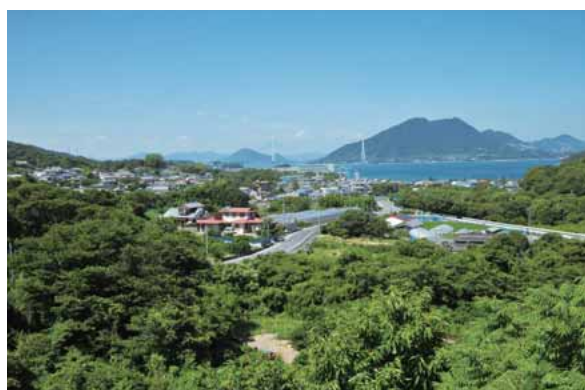
間もなくレモン畑から農作業を中断してご主人の学さんが帰ってきてくれた。日焼けがよく似合っている。「いまはまだ収穫期では



▲「リモーネ」の前で、山崎学・知子さん夫妻

東部の海岸線を3km程行つて脇道へ入ると家々が密集する住宅地になり、間もなく白い木造二階建ての家が現れた。入口には花々が咲き「Limone」(リモーネ)と書かれたブルーの小さな看板がある。その日は週一度の休日、店主の山崎知子さんは奥の納屋でジュース作りをしていた。

▶大三島橋から見た大三島東部地区。この中に山崎さんが栽培している柑橘畑も点在している



ないので食べていただく果実はなくて」と言い、それを待っていたように知子さんが手製のレモンジュースを運んで来てくれた。

柔らかい酸味と上品な香りのジュースで、市販のレモンの強い酸味に慣れた私たちにはちよつと意外。「畑で完熟したレモンは糖分もあつて美味しいんです」と言う。

2階は小部屋や天井を取り外し広い居間に改装されていた。朽ちかけていた家の改修にはかなり出費したようで、漆喰の壁は自分たちで塗つたと言う。空間を生かした板の間が心地よい。2階は誰でも利用できる談話ルームにしており、地域の人がよく訪れる。知子さんを慕つてやつてきた3匹の猫も今では家族になり、まるまる太つて軒下で寝ていた。

住まいは近くに二戸建てを月3万円払つて借用している。車3台が駐車できる広いスペースがあり、家主（農家）が何かと親切にしてくれると言う。

国産リモンチェットロに魅せられて

山崎学さん(44)は東京、知子さん(39)は横浜生まれ。学さんはフリーターを経てサービスマス業に従事、大三島に移住の前はパートの有機野菜売場で働いていた。知子さんはイタリアに留学、帰国後はOLをしていたが、イタリアで飲んだリモンチェットロの味が忘れられなくて、日本にはなぜないのかと思つていふたと言う。リモンチェットロは食後に飲むポピュラーなりキュールのこと。二人は日本のどこかで無農薬でレモン栽培して国産リキュールを作つてみたいと話すようになっていた。

移住した知人を訪ねて、移住するなら早い

方がいい、ダメならやり直せばいいと思い、レモン栽培の産地を調べて大三島、岩城島、広島等を当たつた。その中で、熱心に対応してくれたのが愛媛県東予地方局産業経済部今治市局地域農業室しまなみ農業指導班だった。二人は平成19年3月に大三島に移住し、まぐず店舗に改装できる空き家を確保、学さんは就農準備と研修、知子さんはリキュール作りの準備をはじめた。

知子さんはリキュールを酒造してくれる酒醸造会社を探した。出来るなら、蔵の一隅を借りて自分で酒醸させてくれる場所が欲しい。しかしそんな話に乗つてくれる酒蔵はまずない。リキュールだと？ 酒醸造場に他人が入つてきて別の酒を作る？ とんでもないところも相手にしてくれなかった。そんな中、愛媛県商工会議所の紹介で訪ねた西城市の賀儀屋・成龍酒造(株)の首藤英友専務が協力してもいいと言つてくれた。十年程前にUターンした七代目で、日本酒や焼酎だけでなく若者向けに別の酒を作つてみたいと思つていた時だったと言う。

「偶然のラッキーチャンスで、酒蔵の一部を借してくれることになりました。無農薬レモンを丸ごと使つてしぼり、蒸留水と混合して熟成する。でも納得のいく味を引き出すのは難しく試行錯誤の繰り返しでした。100本ほど廃棄しました」と知子さん。

賀儀屋は四国を代表する日本酒の老舗で、名水が自慢の酒蔵。知子さんの熱意に杜氏も協力してくれて、次第に納得いくリキュールを酒造できる体制が整つた。そのため21年4月に酒類販売業の免許を取り、5月に店をオ



▲大三島リモンチェットロとネーブルチェットロ。ストレートかロックで。フルーツや氷とのカクテルもよい。アルコール度23～24度。各¥2,100
▶右下/リモンチェットロ入り洋菓子
中上/イタリアやタイ製のおしゃれなキッチン小物 中下/八朔の酸味が抜群のソース、果実100%のストレートジュース、レモネード



▲知子さんがデザインしたお気に入りのレモン搾り器を手に入



ープンした。
料理家の栗原はるみさんも店を訪問してくれて絶賛、リキュールの知名度は高まってきたが、ご主人が栽培した無農薬のレモンを使い、全工程が手作業であるため、年間本数は限定されている。今後は知り合いの農家にも頼んで増産、普及を高めていきたいと思っている。最近では顧客の要望で、取れたての有機栽培レモンや八朔、ネーブルオレンジの一部を通販等で販売しているが、たちまち完売になってしまっている。

アゲハ蝶も飛び畑に

学さんが、近くの畑に案内してくれた。道路脇にあるが、畑は少し斜面で、堆肥が入っているせいか結構歩きにくい。2〜3mあるレモンの大木が茂っている。秋収穫のレモンはまだ青いが、時々黄色に色ついた粒もある。

梯子を使つての作業で、大変そうだ。

新規就農した当初、学さんは耕作する農地を近隣農家やJ Aの紹介を受けたが、さらに自分でスクーターで島内を回って借り受けられそうな農地を探し、役場に仲介してもらった。レモンを栽培してリキュールを製造するため、苗から育成するのではなく成長した木のある畑を探した。

瀬戸内の島々はミカン等の柑橘類の栽培が盛んで、どの家でも庭先に数本の柑橘類を栽培している。しかし高齢化や価格の低迷で栽培を辞める農家が増えてきて、特に斜面畑では耕作放棄の危機に直面している。「リモーネ」の前の家も空き家で、庭には柑橘類の木が大きく育っているのに手入れされていない様子がない。

技術の習得では、専門書の勉強に加えて、農業改良普及員や農家、J Aの職員から指導を受けた。学さんが畑

作業をしていると、通りすがりの農家の人が飛んできて指導してくれることもあったと言

う。
最近では、地区の農家からも学さんに手入れしない柑橘畑を再生してほしいと期待されるようになってきており、赤いバイクに乗って畑を回る学さんの姿は住民の希望の星。「ご苦労さま」の声がかかる。

現在学さんの経営耕地は

150a。八朔、温州ミカン、レモン、ライムが各約30aで、他にネーブル、伊予柑、せとかが各5a、7種を栽培している。栽培地は10カ所、他の島にもあるため、回るのも時間がかかる。そのため、レモンを苗木から育てて増産する夢はもう少し先になりそうだ。

「J Aに出荷するためなら害虫駆除して形をよくする等に神経を使いますが、私は無農薬栽培に徹していますので、消毒も化学肥料もしない。夏はもっぱら草刈りと給水です」と学さんは言う。島は初夏から夏まで雨量が少ない上に、沢等の流水が少ないため、毎日600ℓのタンクに水を入れて持参し、畑にまく。

「ただし、乾燥気味の土地の方が病害虫の発生が少なく、ストレスが美味な実をつけます」
作業用には軽トラック、草刈り機、自動噴霧器を購入したが、店舗の改装費も含めてすべて自己資金で対応してきた。

「貯金もほとんど使い果たし、自転車操業で大変なんです。助成金を受けるためにはいろいろ書類を揃えて申請しなければならぬ。無精なんです」と学さんは苦笑する。

畑には柑橘を好物とするアゲハ蝶が飛びまわっている。「木が丸裸になるのは困るけど、葉を多少食べられるのは仕方ないです」と学さんは気にしていない様子だった。



▶「リモーネ」2階の談話室。古民家の良さを生かして大改装した

文／浅井登美子 写真／小林恵

●リモーネ ☎0897-87-2131 www.limone2.com

「農業をする」という 人生の作り方

岩手県西和賀町
にしわがまち

東北有数の豪雪地帯岩手県西和賀町で18年前に新規就農を果たした渡辺哲哉さん。広島出身という西の人ながら、豊かな自然の中で生きる人を選び、北の地に根を下ろした。現在は、土地の特産品であるリンドウ栽培を軸に、米や野菜などではインターネット販売も行いながら、家族5人、心豊かで楽しい農業を目指す。

「自然と共に生きていく」選択

日本列島の背骨とも称される奥羽山脈の懐。そこには濃密な自然と人の暮らしが穏やかに調和する田園風景がどこまでも続く。

今回訪ねた渡辺農園は、この地で18年目の



▲学校から帰った賢平君は父親の仕事場へ一緒に出かけることが多い



▲地域の特産である「西和賀リンドウ」が渡辺農園の主力品種。8月が出荷のピーク

夏を迎えた。約50aからはじまった作付け面積も150aと約3倍に増え、品目も多彩な農園の姿は、園主が積み重ねてきた経験の深さを感じさせる。

園主の渡辺哲哉さん(45)は、1968年に

広島県に生まれ、大学時代は長野と東京で過ごし、卒業後は医療書の編集を主とする出版社に就職した。入社後

しばらくは、編集者として充実した日々を過ごすのが、いつしか頭を占めるようになったのは、農業のことだった。

「同じ東京で働く自分より上の世代のサラリーマンの姿を間近で見るとき、理想とする人生ではないと思えた」というのが農業を考えることになった理由のひとつだが、根っこにあったのは、学生時代に学んだ哲学と、全国各地の田舎を旅した経験だという。

「哲学をやっていた以上、生きることについてどうしても考えます。都会生活を離れて、田舎に行き、土と共に生きる人たちの姿を見ているなかで、自然と共に生きていく暮らしを作っていく、生き方」の選択としての農業に興味を持ちはじめたんです」と渡辺さん。

脱サラして農業を始める。ケースとしてはそれほど稀ではないが、渡辺さんの場合、育った家もサラリーマン家庭という農業においては全くの素人。そう簡単には決心ができるものではない。しかし、30歳になったとき、人生を変えるには今しかない、6年間のサラリーマン生活に見切りをつけた。

「自然の中で充実した毎日を過ごしていく。お金ではなく、自分の中の幸福度を大切にしていこう」という思いが渡辺さんの背中を強く

押したのだ。

そして、土地探しを続けているうちに知人の紹介という縁で、故郷から遠く離れた岩手県西和

賀町（当時は沢内村）にて新規就農者としての第一歩を歩き始めた。

冬期間の仕事をしていくのか

就農から18年を経た現在、渡辺家は、子供が3人の5人家族。リンドウ栽培を軸にした農家経営で忙しい毎日を送るが、青森県出身の奥様と結婚する2002年までは、約6年間にわたり、一人で農園を切り盛りした。

「切り盛りしたといっても、初年度はリンドウ10aと、グラジオラス7a、それに米が10aあった程度。あとは、研修として近隣の農家の手伝いをやっていましたね」。

ちなみに就農にあたっては、一部免除の特例のある就農支援金約500万円を受けた。ただし、就農時に必要な資金のほとんどは、サラリーマン時代に貯めた財形貯蓄でまかない、支援金はその後の運転資金として貯金したという。

また、現在は15年前に新築した家に暮らしているが、それまでは耕作地脇にある農作業小屋暮らしを続けた。

「風呂もトイレもないわけだから、まずはトイレだけ設置して、何とか住めるようにしての温泉通いでしたね。でも、温泉も近いわけじゃないから大変ということも、もらってきた風呂を風除室に取り付けたんです。風除室って玄関ドアを囲うものだから、風呂が玄関にいきなりあるという不思議なことになっていましたね」と、なかなか大変な生活だったようだ。とはいえ、当時は農業を学ぶことに夢中の日々。不便さを感じている余裕はなかったそうだ。

こうして、はじめての農業で試行錯誤の

日々を過ごしていたが、不安だったのは冬期間の仕事。西和賀町の積雪は、少ない地域でも軽く1.5mを超す。2m、3mの積雪も常識の範疇だ。こんな土地では、当然、冬期に農作業は行えない。長い冬をどう生きるかそれは、この豪雪地帯に暮らす人の永遠の問題だという。

渡辺さんもこの問題に直面したが、幸運にも地域にある県の出先機関（農業改良普及センター）で土壌分析の仕事に就くことに。

「村内各地の土を分析して、土壌改良のデータ作りを行うというのが私の仕事でした。周りにいる研究員はいわば土のプロですから、仕事をしながらいろいろと勉強させてもらいましたね。現在、職場が盛岡に移ってしまつて通勤が大変なんですけど今でも続けています。専門家と話をする時間は、農家としては勉強になるし、何より刺激的ですね」と渡辺さん。とはいえ、「ずっと、この仕事を続けられるとも思っていない」とも。

「やっぱり基本は農家。冬であっても農作業で暮らしていくことを考えるべきだと思つています。そこで、昨年からタラノメの苗木を作付けし、冬期出荷の準備を進めています。これは作業場で水耕栽培させることができるので、雪の時期に育ててやれば、春先には出荷することが出来ます。西和賀といえば、良質の山菜で知られる土地ですから、特産品として育てていきたいと思つています」

さらに、この秋からは、10年以上前からネット販売で好評を博しているニンニクも作付け規模を拡大し、冬期間には黒ニンニク加工を行うことも計画しているそうだ。



▲家族で営む農家の暮らし。渡辺さんの理想とする暮らしだ



▲自宅脇には立派な倉庫兼作業小屋。リンドウ関係の農機具が並び

▲農家の庭先は遊びの広場。左から長男・賢平君(8歳)、次女・想子ちゃん(4歳)、長女・智栄子ちゃん(10歳)





▲無農薬で育てる米はネット販売で好評だ



▲昨年作付けたタロノメの苗木は大きく成長した



▲ブルーベリーはネット販売。子供たちのおやつとしても人気



▲山ぶどうは加工品利用を考えて栽培。この果汁で飲むチューハイは絶品とのこと



▲育成中のヤマナシの若木

「奥羽の山里から農村通信」

ちなみに今年の渡辺農園の作付けは、リンドウ70a、田んぼ50a、ニンニクと小麦10a、ブルーベリー5a、タロノメ10a、マメと野菜5a。ここにリンドウから稲へと転作する際に必ず行う調整水田（リンドウで使用した農薬を抜き、地力を回復させるため）の15aが加わる。この春から奥様が会社勤務に就いたため、渡辺さんが再び一人で作業をこなす日々だが、「労働力が減って大変だけど、原点に戻る気持ちでがんばってますよ」と笑う。

農業収入の内訳については、リンドウが8割で、2割が無農薬栽培米を中心としたインターネット通販だ。今後の課題は、この2割の増加だが、それを実現するには、消費者に

渡辺農園をはじめ、地域のことで、農村のことをもっと深く理解してもらう必要があるという。そのため、渡辺さん自身が手がけるHP「奥羽の山里からの農村通信」には、農園以外の地元ネタも数多く掲載されている。また、実践する者としての有機農法の現実、都市と農村の交流など、渡辺さんならではの深い思索と情熱に満ちた記事内容もHPの魅力のひとつとなっている。「都会にはない豊かさ。それがここにはたくさんあります。それを多くの人に伝えていく。インターネットはそのためのツールのひとつだと思っています」と語る渡辺さん。HPには「これまでの田舎から都会へと向かうべくトルを逆にした。都会から西和賀に向かう。豊かさを見つけようとする人」の流れを作っていくというのが願。そこには、東京からこの地に移住し、心の豊かさを見つけた渡辺さんの実感が込められている。

「やっばり土を耕すって面白い」

取材の最後、渡辺さんは、「まだまだこれか

らなんだけど」と笑いながら、畑脇に並んで植えられている果樹を見せてくれた。

「これは、神戸大学が協力してくれて西和賀に実際に生えているヤマナシを接ぎ木して育成したものなんです。ヤマナシって香りが強くて、いろんな加工品で可能性があると最近注目されているんですが、西和賀としては、西和賀で生まれ育った木を使って特産化しようとして進めています。みんなで実をつけるのから楽しみにはしているんですよ」と指差す先にあるのは、まだ2m程度の若木たちだった。

渡辺さんはインタビュー中、「農業は失敗が許されないワンチャンスな仕事」、「簡単には結果が出ない仕事」、「自然相手に完璧なコントロールは望めない」など、20年近いキャリアを持つゆえの農業の難しさを幾度か口にした。それはきつと本心からの言葉に違いない。

しかし、まばゆい陽光が射す田畑に出て、タロノメの栽培法のコツや、米の有機栽培の草取りのこと、パンに適した小麦のこと、いつの日か実をつけてくれるヤマナシのことなどを澁刺と語る姿からは、農業が楽しくてしようがない、という思いがとても強く伝わってくる。

「農業をやってきて、失敗は数えきれませんが、でも、農業には可能性がまだまだあるし、農業という生き方を選んだことに後悔したことはないですね。やっばり土を耕すって面白いですよ」と語る渡辺さん。

これから大きく育とうとするヤマナシとともに渡辺さんのこうした思いが、農園をさらに魅力的なものへと育んでいくに違いない。



●渡辺農園 ☎0197-85-3055
●「奥羽の山里からの農村通信」
<http://www.echna.ne.jp/yukibo/>



▲ウミガメが産卵にくる日和佐海岸



▲国道沿いにある北河内地区の産直市「お山の大将」

地域の美味しい産直市 「お山の大将」

徳島県美波町
みなみちよつ

海山の豊かな自然と阿波踊りや四国八十八力所、霊場等の伝統文化が息づく徳島県。太平洋に面し、ウミガメが産卵に来る砂浜と森のある美波町は、第二のふるさとを探す人たちの心を捉え、移住を決意させる。山河内地区に移住、集落の人と農業をしながら、地域の拠点となる産直店の運営を担うことになった岩沢さんは、さらに地域の産物を料理に生かして提供するレストラン経営へと乗り出した。開店へむけて店には庭師、料理人、パソコンのオペレーター等、1ターンの仲間たちが大勢手伝いに来ていた。

山河内地区の 拠点づくり

古くから徳島県の上灘と呼ばれてきた由岐町と日和佐町は平成18年3月末に合併して美波町となった。南東部は太平洋に接し、黒潮の温暖で良好な漁場になっている。多様な岩礁が変化に富んだりアス式海岸で、日和佐海岸の砂浜はウミガメが産卵にくる場所として知られる。多くは室戸阿南国定公園に指定され、その景観に魅せられ移住してくる人も。

旧日和佐町は美波町の中心的機能を持ち、賑やかな市街地を形成

しているが、観光客で賑わっているのが四国第23番霊場の薬王寺。そして住民で賑わっているのが「道の駅ひわさ」。町観光協会が運営する物産館や足湯が楽しめる休憩所等を併設しているため、買い物客や観光客の姿が多い。

道の駅から「土佐浜海道」と言われる国道55号線を南へ走っていくと道路は海岸から離れて山林地帯へ入り、常葉樹林の中に亜熱帯性の植物も生息している。日和佐トンネルを抜けて少し行くと道路の右手に「お山の大将」

という看板の平屋建ての建物が見えてきた。山河内集落の物産を集積し販売する小さな店で、訪ねた日は改装工事中であった。リニューアルしてレストランを併設した店にする予定で、7月25日のオープンへ向けて大工さんや園芸家が仕上げ工事をしていった。

取材をお願いしていた岩沢康貴さん(37)が、昨夜は寝ていないという様子で現れた。「工事が遅れていましてね。すみません、これから打合せがあるので少し待ってください」と言っていて、裏手にある建物に入って行った。そこは新しい建物で、事務所と物産等の収納室になっている。岩沢さんは、パソコン係、レストラン係と思われる女性と話し合っている。二つの建物を繋ぐ中庭では、さいたま市と岩手県花巻市に仕事場を持つ庭園デザイナー、グロッセ・リュックさんが工事を行っていた。水を使ったフラワーガーデンを演出するそう

で、大きな水瓶を三槽設置して、水を循環させる庭園にする計画のようだ。

庭で草花を植栽しながらグロッセさんの手伝いをしているのが、岩沢さんの奥さん・暢子さんだった。連日の野外作業で、真っ黒に日焼けしている。

グロッセさんと岩沢さんは岩手県旧東和町に在住していた頃の知り合いで、氏の園芸技



◀フラワーガーデン造りをするグロッセさん
夫妻と岩沢さん夫妻(右)



▲新しい装いに、「お山の大将」



自衛隊に勤務、岩手県に駐屯していた時東和町で農業をしようと決意して自衛隊を辞め、地元の農家で働いて農業のノウハウを学んだ。暢子さんは障害者のセラピーに園芸を取り入れる施設で働いていて、岩沢さんと知り合った。結婚して長男が誕生、

内産直市「お山の大将」のスタートだった。農産物や魚介加工品を販売するだけでは道の駅ひわさには勝てない。「お山の大将」は国道沿いの室戸を結ぶ幹線道にあることから、集落内にあるフランス料理店の指導で、ハンバーガーやソーセージ等の軽食・喫茶コーナーを併設したところ、ドライバーにも好評で、休憩所として人気を博してきた。今回の改装は、レストラン機能を整備・拡充するためのもので、我々が訪ねた時はすでに本格的な調理室が完成、新厨房の中でシェフが試作品作りを行っていた。

野菜からシカ肉まで加工 レストラン料理に生かす

一方、農家が栽培する野菜は、昔ながらの方法で農薬も化学肥料もほとんど使用していないことから、阪急デパートの野菜売場で販売してもらう道筋をつけた。全国にある50店が店頭で販売してくれるそうで、農家の安全安心、美味な野菜として人気があるという。山内地区の契約農家が収穫した野菜・果物は、その日の夕方までに「お山の大将」に届けられて、収納室で一晩低温保存し、翌朝宅急便業者が運んでいくシステムになっている。訪ねたその日の午後には、収穫したてのトマトやズッキーニが届けられていた。

畑で完熟して出荷出来ないトマトは、「お山の大将」の厨房で煮詰めてソースやジュース等に加工し、冷凍保存している。同様に、玉ねぎや人参、トウモロコシ、市場に出荷しない小魚、魚介類等も



▲農産物や魚介類は加工して冷凍保管している



▲農家から届いた野菜。集まったものは翌朝宅配業者が集めてくる
▶庭園の植栽をする岩沢暢子さん

本格的に農業をしたい、出来ればもう少し暖かい場所、冬も働ける場所に住みたいと、知人の紹介で美波町にやってきた。

町の南部に位置する北河内地区に空き家と農地を借りて、施設トマトや路地野菜の栽培を始めた岩沢さん夫妻だが、昨年ひとつの転機が訪れた。地区長だった長本さんに頼まれて山内地区の拠点となる農水産物を販売する店を開設することになったのである。

地区の人は、農薬や化学肥料を減らし昔ながらの方法でさまざまな野菜を栽培しているが、小さな農地では収入は限られてしまう。岩沢さんは農産物や魚介物に付加価値を付けるにはどうしたらいいかを考えてきた。産直店設置は岩沢さんの夢でもあった。

資金は、地域資源を活用した新たな産業を創出することで適用される農山漁村6次産業化対策事業補助金を活用、岩沢さんが店舗運営の責任者を担うことになった。今年2月、地元の有志や住民ボランティアに協力してもらい、木の切り出しから運搬、大工仕事も行って、手作りの店舗を建設した。それが北河

術を高く評価する夫妻は、今回わざわざ美波町へ来町してもらった。

岩沢さん夫妻は10年前に岩手県旧東和町から移住してきた。康貴さんは岐阜県生まれ。

◀「ラトリエあべ」の庭園と建物





加工処理して冷凍保管し、料理に活用している。

それらを指導し料理に生かすアドバイザーをしてくれたのが、フランス料理店「ラトリエあべ」の阿部節夫・起三シェフである。「ラトリエあべ」は一日昼食・夕食に各一組だけの予約客に本格的フランス料理を提供する店。あとで店のたたずまいを見学させてもらったが、手入れされた庭園や民芸品が配された重厚な古民家のレストラン。予約した客はアンティークな和室で庭園を眺めながらゆつたりとコース料理を味わう。極上なひとときを過ごすことができそうである。

阿部シェフがいまこだわっているのが、害獣と言われるイノシシやシカ肉を商品化して販売すること。野生のシカやイノシシの肉はヨーロッパではジビエ料理として食習慣があるが、日本ではなじみが薄い。四国各地でも田畑に頻繁に出て来て被害が増えているが、肉の活用がなされないため、駆除が進展していない。

阿部シェフは吉野川市の加工業者に依頼して商品化した。特有の臭みを取り除き、野生風味を生かして豚牛肉以上に美味しく料理する方法を開発して、客からも好評を得ている。

「お山の大将」では、シカ肉ソーセージのホットドッグ、イノシシ肉と牛豚肉の合いびき肉ハンバーガーが名物。さらに地元産トマトや玉ねぎをふんだんに使ったパスタ等のオリジナル料理が提供される予定だ。岩沢

さんは「改装前の店でも試食してもらい、客に好評でした。この新製品が収入に結びつけば、害獣駆除が促進され、農産物の被害が減ると期待しています」と言う。

これらの素材はすでに用意しており、冷凍庫にはそれぞれビニールに入った加工食品がかなりの量、保管してあった。

農的生活をとり戻す!?

新産直店の事務を担っているのが岩月智里さん(44)。愛知県岡崎市の出身でトヨタ本社でOLをしていたが、5年前に海陽町に移住してきた。サーフィンで海陽町によく来ていたことからインターンしてしまったと言う。ネットでは山内町の産直市「お山の大将」を知り、手伝うことになった。「田舎では仕事の選択肢が少ない。得意のパソコンを生かせればと思います」と言って、改装オープンに向けて用意しているマークや看板をプリントしてくれた。

新マークをデザインしたポデスワ綾子さんは広島市の出身。10年前に美波町に移住し、コンピュータを使って翻訳やデザインの仕事を続けている。

仕事の合間を見て、岩沢さんが自分の畑へ案内してくれた。車で10分ほどの道路脇にあり、ハウスや畑、その奥に小さい水田が何枚かある。

「今年は産直店の仕事に追われて野良仕事をする時間が足りません。農業一本でやっていた時の方が収入もあつたしストレスもなかったな」と自分を叱咤するように言って、雑草が茂る畑の草むしりを始めた。岩沢さんは農

作業が好きで、よく似合っていると思った。

岩沢さん夫妻には二人の子供(小学4年生、2年生)がいる。奥さんの伸子さんも店を手伝っているため、いまは学校が終わると「お山の大将」へやってくるそうで、店が改装オープンして軌道に乗ったら、元の農的生活へ戻りたいという思いを垣間見た気がした。

なお「お山の大将」は10日間ほど遅れて8月7日に無事開店し、大賑わいしているとのこと。加工食品はいずれ通販も予定しているそうだから、ぜひ北河内産ジビエを味わってみたいと思う。

文/浅井登美子 写真/小林恵

●産直市「お山の大将」☎0884-70-1217

◀雑草が茂っている野菜畑を苦い思いで見る岩沢さん





中国山地から流れ出る豊かな水と肥沃な土地、昼夜の気温差等により、庄原地方は中国地方を代表する米どころとして知られる。モチ米の生産率も高く、餅米加工食品も多い。しかし高齢化や米価の低迷で、稲作を止める農家が増え、休耕田も目立つようになってきた。雑草が茂る農地を何とかしたいと、かつて自分がそうであったように、父親は息子をUターンさせ、二人で地域の水田耕作を引き受けることにした。総領の豊かな自然環境も守りたいと語る山根さん親子を、猛暑の田圃で取材させてもらった。

「休耕田にしない」親子で励む米作り

広島県庄原市総領町

地域の環境と暮らしを守る①

「はい、山根です」とにこやかな笑顔で現れたのが山根京司さん(55)の奥さん・ひとみさんであった。介護福祉士として長年働き、今は障害者支援施設「ともいきの里」に勤めているとのこと。施設は「傍楽喜屋」と称して創作活動に力を入れ、制作した木工品等が多数売られていた。

奥さんが携帯電話で連絡してくれ、山根さん親子の乗る軽トラが迎えに来てくれた。

田総川沿いにある水田は面積が比較的小さく、場所によっては棚田が並ぶ丘陵地域もある。そのため高齢世帯は耕作を放置、兼業農

旧総領町は庄原市東部に位置し、田総川沿いに開けた丘陵大地。以前「でぼら」では高齢者福祉総合センター「ユーシヤイン」を取材した。施設が街であり人々が集いいつもの暮らしを楽しむ場であるという発想で運営され、その小規模・多機能・柔軟対応が評価され、優輝福祉会が運営する福祉施設は現在庄原市内に10数カ所ある。日中は田圃に出て作業中という山根さん父子を稲草集落に訪ねるため、福祉施設「ともいきの里」を目標に行ったところ、施設から

家も農器具を揃えてまで稲作を続けられないと、耕作をやめる世帯が増えてきた。「田畑が荒れてくると猪が出て来る、町の自然環境も悪化していく。地域にとって一番好ましくない状況だと危惧してきました。そのため以前から何軒かの農家に頼まれて耕作を手伝ってきたのですが、4年前に稲作栽培認定者、つまり代行して栽培するという資格を取得しました。一人では対応できないので長男の匡彦をUターンさせたのです」と父・京司さんは言う。

山根匡彦さん(30)は高校を出ると、全国チェーン店舗を持つレストランに社員として就職したが、熊本店や高知店の開店・運営に関わるようになってからは一日14、15時間働くこともあったと言う。「農産物の加工現場を学ぼうと就職しましたが、そうはならなかった。30歳前には辞めようと思っていたので、父の『二人で地域の田圃を守ろう』という誘いが嬉しかったです」と匡彦さん。



▲軽トラに農器具を載せて出発
▼堰を止めていた水路を開けて水を流す

●稲作代行認定エコファーマー／山根 ☎0824-88-2257

◀「森の宝石」といわれるブッポウソウ。
総領町は貴重な生息地でもある



「私も40代まではサラリーマンをしていました。親が農業をしていて、そろそろ体力的にも厳しいと分かったので、会社勤めを辞めて農業を継ぐことにした。自分の息子には帰ってこいと言えない農家が多いですが、農業は収入を得て稼ぐ以前に、先祖が守ってきた農地を耕作して地域の環境を保全していくという役割も担っています」と京司さんは言う。

山根さん親子が代行栽培する農家数は30戸、水田面積は13ha。「北海道なら一戸が耕作する面積ですが、ここらは1反歩程度の農家が多い。機械で手際よく耕作できる水田は少なく、耕作地は総領以外にも点在するため、移動だけでも時間がかかります」

一斉に田植えが始まる頃は目の回るような日々だという。いまは田植えも終わりホッとした時期かなと思つたが、毎日の水回りや土手の草刈り、病害虫の発生とその対応等、休める期間はなさそうである。特に、一度耕作を放棄した水田は土地が劣化しており、水漏れや雑草が多く、肥沃な水田に再生するまでには何年もかかるようだ。

自然環境・住環境に配慮して低農薬で

その日は晴天、気温は午前中ですでに35度を超えている。成育中の稲にはよさそうだが農作業にはきつい。案内してくれた田圃の周辺には新しい一戸建て住宅が数軒建っており、奥に山根家の農機具倉庫がある。

水田は3日間ほど水を抜いて干していた。稲が根を張り、雑草や雑菌の繁殖を

防ぐためだという。田の周りには小さな蛙達も飛び回っている。

稲の様子を確認した匡彦さんが「もう水を入れましょう」と言い、二人は住宅の裏手にある取水場へ行った。

重い取水口の留板を持ち上げると、一斉に水田へ向かって水が勢いよく流れはじめ、乾いた田を潤い始めた。待っていた蛙たちが田圃へ戻っていく。水を入れる間、二人は畔道を草刈りする。周辺をきれいにしておくことで病害虫を防ぎ、水田のある美しい景観を住民にも理解してもらおうことが出来るからだ。

総領町の東部地区には灰塚ダムがあり、かつてこの谷合いの集落で暮らしていた人たちが移住した新しい街がある。その時町では同時に、各地に町営住宅や分譲住宅等を造成建設した。その住宅政策のおかげで、総領には若い世帯の移住があり、人口は減少していないようだ。

「住宅が増えています、自慢は森と川のある環境。森にはブッポウソウが棲み、川にはアユが沢山生息している。ホタルも飛ぶ。だから農薬も化学肥料もほとんど使っていない」と京司さんはきつぱりと言う。山根さんが栽培している米はコシヒカリとひとめぼれ。最近では匡彦さんがブログで写真とイラストで紹介し、通販でも徐々に人気が出ているようだ。京司さんは漁業組合の理事長もしている。あとでアユのいる田総川を案内してもらった。葎が茂る自然態の川で、堰へ向かって跳ねるアユの姿が橋の上からも観察できる。今年6月には県知事も視察に来た。昨年は頼まれて他所の漁組へ1トン程のアユを提供した。

そんな川と深い森があるせいか、総領は絶滅が危惧されるブッポウソウの生息地としても注目される。口づばが赤く体はブルーが美しい中型の野鳥で、ホーホーという素朴な鳴き声が住民からも愛され、森には巣箱も設置されるようになった。山根さんの農機具倉庫の裏手の森にも生息しており、匡彦さんは巣箱を幾つか取りつけて観察を続けている。

農機具を収納している倉庫を見せてもらった。シャッターを上げると、大型コンバインと作業を終えた田植機が並んでいる。コンバインは一台800万円以上、田植機は今年車輪の爪の一部を修理して8万円したそうで、農業機械はかなり高価である。小さな田植機でも200〜300万円というから、耕作地がそれほど広くないこの地区で田植機を購入してもお米を販売して採算を取るのには難しい。代行栽培の山根さんの場合も似た状況で、現在のように米価が安いと借地代を払うと赤字経営になってしまう。そのため出来高に応じて収穫した玄米を渡すことで何とか維持しているようだ。

「いくら休耕田をなくして生産拡大をはかろうとしても、耕作地が分散している中山間地では厳しい。農地の集約化が必要で、そのためには土地保有の規制を緩和すべきだが、農家の体質は昔のまま。いま頼りになるのはかあちゃんだけですよ」と京司さんは苦笑した。

文／横田搭美 写真／小林恵



▶アユの宝庫 田総川
▶収納庫に納められているコンバインや田植機。点検や整備が欠かせない



地域の環境と暮らしを守る②

風土を活かしたむかし味 「げんたのやさい」

山梨県笛吹市芦川町
ふえふきしあしがわちよ



発送する野菜を収穫中の川辺さん夫妻。発送先は30軒ほどある

甲府盆地の中央に広がる笛吹市は、桃と葡萄の収穫量日本一を誇る果樹の町。2006年この笛吹市に吸収合併された芦川町は、市の南端、標高800〜1000mの山間に拓けた地域だ。

芦川町への東京方面からのアクセスは、これまで中央道から南下するのが一般的なルートだったが、2006年、河口湖側から峠を貫く若彦トンネルが開通したことにより、芦川町へのアクセスはぐんと便利になった。

トンネルを抜けると、鳥のさえずりが響き渡る集落の外れに出た。開発された河口湖周辺のモダンな景観が嘘のように、ひっそりと落ち着いた山里の暮らしが現れた。

川部源太さん(27)が神奈川県川崎市からこの町に移り住んだのは5年前。両親ともに都会育ちという青年が、こんな山奥の集落に住むことになったのは、何故なのだろう。待ち合わせの農産物販売所「おごっそう家」に現れた川部さんは、素朴な風貌に人懐こそうな笑顔をたたえた青年だった。

直売所の誰もが親しそうに声をかける。「ほたちゃんは」という声があちこちから聞こえ

る。集落の人気者・ひとり息子の穂太君の話が飛び交っている。

「慶応ボーイに百姓ができるのかい」

直売所の店長原百枝さんは、初めてここへ来た頃の川部青年にこんな言葉をかけた。「ここで食べていくのは大変だよ。慶応ボーイに百姓が出来るのかい？」

これまでも何人かの移住者がやってきては、去っていった。四方を山に囲まれた山間地での生活。ここで住むにはそれなりの覚悟が必要だった。川部さんはその暮らしを深い眼差しで見据えた。

出身の慶応大学では卒業後、多くのクラスメートが銀行や外資系企業に就職していった。そんな中、ただ一人農業を選択した川部さんだ。在学中、モンゴルへ一人旅をした。その時出会った草原で働く少年の力強い姿に、衝撃



▲集落の世話役市川さんと。地域の人は親しみを込めて「邦忠さん」と呼ぶ



◀川部さんの野菜も並んでいる農産物直売所「おごっそう家」。集落の拠点

大学卒業後、大手企業への就職活動に背を向けて、人口500人足らずの集落に移り住んだ若者がいる。土など触ったこともない典型的な都会っ子だったその彼が、今では見事な高原野菜を育てている。移住後5年。妻と2歳の子供との暮らしを、地域の人は家族のように見守り、町の保育所には、たった一人の園児である息子の穂太君が、今日も元気に通う。

標高800mの山間地

富士山が世界遺産に認定登録された数日前、富士山麓の河口湖から峠をひとつ越えた小さな集落、山梨県笛吹市芦川町を訪ねた。

を受けたという。

「たとえ子供であつても、自分たちの食べるものは自分で手に入れる。当たり前のように乳搾りをして働く子供たちを見て、そんな事が何ひとつ出来ない自分を恥ずかしく思いました」

食べることはいのちに直接繋がっていく。

「農業」がしつかりとした輪郭を持って川部さんの視野の中に入ってきたのは、その頃からだった。

そんな川部さんを支えてきたのは大学の恩師である川村晃生教授（現名誉教授）だ。国文学の学者であり、「環境学事始め」などの著書も多数あり、市民運動家でもある川村教授は、昔の和歌や日本古来の文書に残されてきた日本人の自然観から、現代の環境問題を考えていくという、興味深い授業を長年続けてきた。20年近いこの授業から農業という分野へ、実践的に進んだのは、数多い教え子の中で、川部源太さんただ一人。異色の生徒というべきか。



▲芦川村長だった頃には山村留学にも力を入れていた野澤今朝幸さん。移住者の窓口になればと、頑張る

卒業後、川部さんは山梨県出身の川村教授の世話で、甲府市の米作り農家に農業研修生として住み込むこととなる。

無農薬・有機農法で稲作とナス栽培を手掛けるこの農家で、川部さんの農業修行第一歩が始まった。夏の陽に灼かれながら、田んぼの果てしない草取りを日々行った。

ほぼ一年をここで学んだ後、恩師川村教授から、市民運動グループ「みどり山梨」の仲間、笛吹市議会議員の野澤今朝幸さんを紹介された。

野澤さんは合併する以前の芦川村長だった人だ。「そろそろ自立して自分の野菜を作ってみたい」という川部さんの意向を聞き、借りられる畑と家のある芦川町への移住を勧めてくれた。

風土を活かして作物本来の力を引き出す「げんたのやさい」

甲府盆地から南へ山ひとつ越えた芦川町。深い緑の中に、人々が温かく繋がって暮らすその町に、川部さんの心は動いた。

野澤元村長さんの世話で、空き家になっていた古い民家と畑を借り、農薬や化学肥料を使わない昔からの自然農法で、野菜作りを始めた。山間部で傾斜地が多く、果樹栽培や稲作には適さないこの地域では、野菜作りと山仕事で暮らしの中心だ。

秋も深まる11月から3月までは、川部さんも山に入り、間伐作業などで現金収入を得る。今でこそ、笛吹市には、Ｉターンした新規就農者への支援事業制度が設けられているが、川部さんが移住した頃はそうした制度もなく、



▲▼味噌蔵等のついた民家を家賃2万円で借りている。畑は地主さんの好意でほとんど無料。▶後ろにあるのは自慢の祭り用の半天。祭りには夫妻で大活躍する



自立して頑張る他なかった。

移住一年後には横浜から妻となる恵子さん呼び、結婚。今では2歳になる長男穂太君もいる。

川部さん夫妻の作る野菜は「げんたのやさい」とネーミングされ、主に首都圏や周辺地

▼週一度、東京文京区で開く直売の店「ちいさなやおや」。
珍しい野菜には恵子さんの手作りレシピも付く



域に宅配で届けられる。収穫後のレタスを食べてみた。これが、驚く美味しさであった。しつかりと野太いむかし味には理由があった。固定種・在来種にこだわり、山の落ち葉を発酵させ、カヤなどを利用して、畑に虫や微生物の生きやすい環境を作る。地元のお年寄りから学んだこの風土を活かした農法は、フランスのいい生態系の中で肥料を与えずに、作物本来の力を引き出すという、理に適ったもの。

収穫した野菜は宅配の他、集落の直売所や、週に一度都内の知人に場所を借りての直売も行っている。

「自分たちの作った野菜を届けることで、食物は土から生まれるというシンプルで大切なことを、伝えていきたい」と、川部さん夫

妻は話す。このしつかりとしたむかし味の「げんたのやさい」を、毎週心待ちにする利用者が増えている。

たった一人の園児を迎えて

「芦川へき地保育所」は川部さん夫妻の長男穂太君が通う笛吹市立の保育所だ。園児は現在穂太君一人だが、来年には入所予定の子供もいる。

清潔で気持ちの良い空間に、渡辺きよみ所長と保育士の岩崎勝子先生、穂太君の3人の歌声が響き渡る。たまには別の保育所の園児が遊びに来たり、近所のお年寄りたちが「今日は居るかあ？」と覗きに来たりで、穂太君も飽きることはない。

「穂太ちゃんはこの村の宝なんです。子供たちの歓声が聞こえることで、ここはお年寄りの心の拠り所のような場所になっているんです」と、渡辺所長は話す。

年間運営費1000万円というこの保育所運営の現実には、賛否両論あるのは事実だが、「利用希望者がいる限り、保育所は開けるという方針です。若者の定住促進にも繋がりますから」と、笛吹市役所保育課須田課長の言葉は力強い。

誰もが暮らしたいの達人だから

集落には何人も名人や達人がいる。山仕事の人、炭焼き名人、竹細工の名人、屋根葺きの達人、石垣積み名人、土作り・堆肥作りの達人などなど。山村文化が育んだこうした高度な技をもつ人々に、川部さんの日常は支えられている。



「畑をやっていると、通りがかりのお年寄りが『それじゃあダメだ』と言って、凄い技術を実にさらりと教えてくれるんです」と川部さんは嬉しそうにいう。

市川邦忠さん(78)も川部さんにとって、そんな尊敬する長老の一人だ。中学卒業後、土方をやって、25歳で役場に入り、最後には教育長まで勤め上げたという気骨のある人柄に、惹かれている。

見渡せば、それぞれが素晴らしい人生の先輩ばかりだと、この限界集落に来てしみじみ思う。山間に156棟もの兜造古民家(かぶまがらみ)が点在する日本の原風景のようなこの町に、川部さんは深く静かに根を張り始めた。

文／金山淑子 写真／小林恵

●げんたのやさい ☎055-298-2470
ブログ：ameblo.jp/gentanoyasai

▶「今年度も存続と言う、笛吹市の決断が嬉しかった」と、保育所の渡辺所長。穂太ちゃんは集落の宝物



◀幻の花と言われる中村農園の「ヒマラヤの青いケシ」

6月下旬、南アルプスの標高1560mの高原は、幻の花といわれる「ヒマラヤの青いケシ」が神秘的なブルーの花を一斉に開花させ、美しい山野草と共に、訪れた花ファンや観光客を感動させた。栽培が極めて難しいという高山植物・青いケシを20年近くかけて5000株以上に育成してきた中村農園の中村元夫夫妻。その日も農作業をしながら、観光客の求めに応じて、わが子を愛しむように説明に追われる。

「日本で最も美しい村」の一つに認定される大鹿村（人口1200人）にとって、青いケシはそのシンボリック的存在、高原野菜や花卉を栽培したいという若者が増えてきている。

▼開園を待つ訪れた観光客。花好きな女性が多い



地域の
環境と暮らし
を守る③

“美しい村”の高原を彩る【ヒマラヤの青いケシ】

おおしかむら
長野県大鹿村

森を抜けると花卉園と路地野菜畑

赤石山脈の山裾を南北に走る秋葉街道、その中程にある山里が大鹿村。江戸時代にもたらされた地歌舞伎は300年たった今も村民たちに伝承され、「大鹿歌舞伎」は国の重要文化財に指定されている。

地質学的にも中央構造線が走る場所として

注目され、街道沿いにある中央構造線博物館の前庭からは断層地形をはっきり見ることができる。そこから村に入り、塩川沿いに広がる市街地を過ぎると、いきなり深い山々になり、幾つかの集落が点在している。

役場から約30分、鹿塩地区の一番奥まった塩川の源流にあるのが沢井集落。東京から1ターンした夫妻が営む手打ちうどん店「河原嶋」の先を、クルマで約20分ほどS状の坂道を登っていくと、いきなり広々とした畑地帯が現れた。

標高1200m、高原野菜の栽培地で、花卉栽培をする中村農園のハウスや農場もある。さらに「ヒマラヤの青いケシ園」の小さな看板を目印に森の中の緩やかな坂道を登っていく。大池高原と言われる地区で、手入れされた山林にはカラマツの巨樹が枝を広げ、地面にはシダや高山特有の植物が緑の絨毯を形成している。

▶標高1560mの山間にあるケシ・花卉の中村農園と高原野菜畑





森が切れて、太陽がまぶしい畑地帯が出現した。その先の丘陵地に花園が広がっている。「幻の青いケシ」を見るための長い道程がヒマラヤ等の高地を連想させる申し分ないロケーションである。青いケシが咲く6月、7月には貴重な花を見たいという観光客が関東関西から訪れ、農園入り口には臨時の駐車場と受付が設けられている。

早速ケシの咲く農園へ駆けつけた。粉碎した麦藁を敷きつめた地面は、歩きやすいと共に、地面の温度を上げすぎず乾燥を防ぐ工夫なのだという。30数個の畝が作られ、畝ごとに長年手塩にかけて育ててきたケシたちが葉を広げ、1m程伸びた茎の先に青い大きな花を咲かせている。

透明感のある神秘的な美しいブルーの花は、

優雅に誇らしげに咲き誇っている。穏やかな陽ざしと爽やかな風に、花卉は小さくそよいで応え、日本ミツバチと思われる蜂も忙しそうに飛び回っている。

冬はマイナス20度の高地で

青いケシの正式名はメコノプシス。ヒマラヤや中国雲南省の標高3000〜5000mの高地に自生する高山植物だが、高地でも数本単位で短期間だけ開花するため「幻の花」と言われてきた。中村農園は標高1560m、耕地は3ヘクタールあり、高原野菜や大豆等も栽培している。

花卉栽培をしてきた中村元夫さん(70)は、山深い大鹿村の風土だからできる花を栽培したいと研究し続けて来て、20年前にヒマラヤの青いケシに出会った。種を取り寄せ、ひと冬冷蔵庫で保管してから土にまいて発芽させる。5、6cmに育てた苗は、ポットから出して山頂の畑に植栽する。さらに畑で一年経つと根付いたものが小さな花を咲かせる。秋になると優良株から種を採り、発芽させる。それを毎年繰り返ししてきたというが、長年研究して来た中村さんならではのノウハウがあるようだ。

「この冬はマイナス20度になりますが、雪が降るので根はその下で耐えることができます。青いケシは、寒さには強いが夏の暑さと乾燥が大敵です。結構栽培が難しい花で、標高1200mある下の農場では育たない、育つたとしても美しいブルーにはならないです」と中村さんは言う。

「家は下の方にあるので、春から秋まで山に

通い続けて来るんです」とたか美夫人は言う。二人の娘を学校に送りだし、お弁当を作って山に登り、ご主人の片腕として働いてきた奥さんの努力も大変だったろうと思う。

200株からスタート、試行錯誤を続けて株を増やしてきて現在では5000株以上が育っている。当初植栽したものは地面に根を張り、たくさんの枝と蕾をつけて、一段と大きな色濃い花を咲かせている。

現在日本国内でも数カ所で青いケシ栽培が



▲売店では山野草を販売。中村たか美さんと菅原裕美子さん



▲メコノプシスホリデュラという小さいケシを植える中村さん

▶入園料は500円。マイクロバスも次々訪れる



行われるようになったが、5000株以上を栽培して一斉に開花させている農場は世界でも中村農園だけようだ。

中村さんは、その日も下の農園から運んできた小さい苗木をポットから出して移植する作業に当たっていたが、観光客に聞かれると作業をやめて、「これは15年前に植えたもので、毎年いい花を咲かせてくれます」等と、我が子を語るようにやさしい笑顔で説明する。

その日植栽していたのは「メコノプシスホリデュラ」という5枚の花弁をもつ小さいブルーのケシで、他に黄色いケシ・メコノプシスカンブリカ、オレンジ色の華麗なトロリュースというケシもある。

さらにケシ畑の周りには西洋オダマキ、スカピオサ、タイツリ草などの花が一斉に咲き誇っている。花に詳しい女性観光客たちから「どうしてこんなに美しいのかしら」とため息が聞かれるほど。高地ならではの気候と、厳しい冬を乗り越えてきた山の草花の野趣あふれるパワーが、健康的な枝葉と色鮮やかな花を咲かせるのだろう。

大鹿歌舞伎が取り持つ縁

植物研究者・中村さんのもう一つの顔は「大鹿歌舞伎」の名女形役者であること。どこへ出かけてもファンから「中村さん！」と声がかかるほどの人気者で、写真で拝見させていただいたが、女形の中村さんは何とも艶っぽく美しい。

そんな中村さんにとって思い出深い人が俳優 原田芳雄さんだった。映画「大鹿村騒動記」で主演し、それが遺作となった。原田さんは

NHK長野放送局が2008年に制作した「オシャシヤのシャン」で大鹿村を訪ねて大鹿歌舞伎に興味を持ち、大鹿村と歌舞伎をテーマにした映画出演に意欲的だった。「大鹿村騒動記」は撮影のすべてを大鹿村で行い、大鹿歌舞伎の運営や役者を長年担ってきた中村さんらも交流、出演した。

「原田さんは、顔や役柄の厳ついイメージと違って気さくでとても温かい人でした。私の畑へ青いケシを必ず見に来ると言っていたのですが、映画公開した三日目の2011年7月19日に死去されたという訃報が入ってきました。病を押して出演し、入院されていたことを知りませんでした。それで青いケシを送ったんです。そしたら娘さんがその花をお棺の中に入れてくれ、ブログでも紹介されたようで、映画はロングランになり、青いケシも知名度を高めたようです。普通は切り花にはしないのですが、昨年の一周忌にも送らせてもらいました」と中村さんはしんみりと語る。

「大鹿歌舞伎」は5月と10月に公演される。ご主人の元夫さんは祭りの準備と役者で、奥さんは仲間と400人分の弁当作りに大忙しの日々をおくる。ちなみに、映画で主人公の風祭善（原田）は鹿肉料理の食堂を営んでいるが、映画後に撮影に使った店はきれいに改装されて、鹿肉料理も提供されるようになった。料理家が吟味して開発した「鹿肉カレー」も村の特産品の一つとして販売されている。

移住して来る人に人気の村

中村農園には地元の高齢者や都市からIターンしてきた人が何人か働いている。5年前に

移住、農繁期に応じて農作業や花卉栽培を手伝ってもらっている中野比呂樹さん(27歳)、その日は別の仕事で残念ながら会えなかったが、皆が助っ人として頼りにしているようだ。中村農園の売店を手伝う菅原裕美子さんは神奈川県葉山市からご主人を残して農的生活をしたいと大鹿にやってきている。「海で世話になったぶんを山に還元したい」と菅原さんは日焼けした顔をほころばせる。中村農園の近くには自然農法を実践する女性グループの農園がある。人参、トマト、キャベツ等、高原で路地栽培した野菜は甘くて美味しいと人気だ。

家族5人で青いケシを見学に来ていた宮崎純平さん(32)、晴子さん(30)夫妻は横浜から2年前に移住してきた。晴子さんの実家が大鹿村にあるため、実家の農業を継ごうと頑張っている。都市からIターンしてきて古民家でレストランや民宿を経営する人も何人かおり、東京からきた主婦は「コンビニもない村だけれど、自然と人情が豊かで開放的で、とても住みやすい」と語る。

村では、ミニ体験ツアーや空き家情報の発信にも力を入れている。

文／浅井登美子 写真／小林恵



▲移住してきた宮崎さん一家と中村元夫さん。中村農園で



◀Iターンした夫妻が営む古民家レストラン「河原嶋」。釣り人の宿としても人気

●中村農園 ☎0265-39-2372
●大鹿村役場 ☎0265-39-2001

▶育苗ハウスではトドマツ、カラマツ等を栽培。
2、3年育てた苗木を山に植林する



「環境未来都市しもかわ」 森林の恵みが暮らしを支え、未来を築く

北海道下川町
しもかわちやう

森林を保全しながら資源として活用しようという提案したのが元町長原田四郎氏だったと言う。その反骨精神は住民にも受け継がれ、凍てる冬を幻想的に演出したアイスキャンドルフェスティバル、冬の森を活かした全道ノルディックスキー大会等、下川町の若者たちが考案して始めた行事は北海道の冬のイベントとして定着し、ノルディックスキー大会には全国から400名以上の選手が集合する。

下川町総面積の88%は森林である。その大半が国有林であるが、昭和28年より少しずつ国有林の払い下げを受け、4500ha以上が町有林になった。町では町有林50haを毎年伐

国産材価格の低迷や林業者の高齢化や森離れなどで日本の森は荒れ、林業は衰退を続けてきたが、

先人達が育ててきた森林が住民の暮らしを守ってくれたことを肝に銘じ、町を上げて愚直に植林・間伐活動が続けてきた下川町。森林の国際的認証である「FSC森林認証」を北海道で初めて受け、持続可能な林業経営の基盤を確立した。平成16年度より木質バイオマスエネルギーを導入、循環型森林経営の先進地として経済基盤と雇用を確保、23年には「環境未来都市」に認定された。いま世界が最も注目する町は、平成30年までに熱や電気を木質バイオマスエネルギー100%の転換をめざして邁進中。その構想は決して夢ではないことを、各現場を見学して実感した取材であった。

厳しい環境を乗り越えて森林資源を活用

下川町の面積は東京23区に相当する644.2km²で、人口は3600人。大正6年には金山の採掘がはじまり、同8年には国鉄名寄線が開通、三菱金属鉱山による銅鉱山が活気を呈し、人口は1万5500人になった。しかし昭和58年に廃鉱となって鉱山労働者は出て行き、その後JRの廃線、営林署の統廃合、林業の衰退と、町は目に見えて衰退して行った。

しかも夏は高温多湿で30度になるが、冬は積雪寒冷地でマイナス30度にもなる。この厳しい環境を地域の優位性と捉えて、恵まれた

採・植林して、60年サイクルで無限に繰り返すことができる持続可能な循環型森林経営を確立してきた。

間伐した木材は余すところなく活用して、住宅や土木用資材、燃料、堆肥資材等に生かされ、今では民間木工場の他に森林関連企業・団体が15件となっている。雇用の場にもなっており、下川町森林組合で働くI・Uターの若者は50名を超



▲環境未来都市推進本部長春日隆司さん(左)とバイオマス産業戦略室山本敏夫さん

え、まだ30名が就労を希望して待機中だと言う。

役場は鉄筋コンクリート建てだが、内部は壁にカラマツ材の温かい質感を生かし、床はタモ材のフローリング等、森林の町の特色が随所に活かされている。

町では平成20年に低炭素化を先駆的に進める全国の「環境モデル都市」に認定され、その後「環境未来都市推進本部」を設置した（本部長／春日隆司氏）。同本部にある森林総合産業推進課・バイオマス産業戦略室のグループリダー山本敏夫さんが私たちの取材に対応して関連施設を案内してくれた。現れた山本さんは若くて知的、応対もスマートなイケメンある。2年間霞が関の内閣官房へ、1年間は林野庁に出向して、今春帰ってきたばかりだという。「出向中は全国各地へも見学に行きましたが、やはりふるさと下川が一番です」と言う。

山本さんは「環境未来都市しかもかわ——森林活用による小規模自治体モデルの構築」というパンフレットを用意してくれていた。町の概要に始まり、木材加工のシステムと製造された商品群、木質バイオマスエネルギー利用図、地域材活用の低炭素化住宅支援策、エネルギー購入費と雇用創出等々の最新情報を図式化して説明したもの。見学者が多い中で、バイオマス産業戦略室には4名の職員で対応しているというから、かなりハードだとお察しするが、山本さんは要点を丁寧に説明してくれた。

会議を終えた春日隆司本部長も顔を出してくれた。幼い頃町を出て行く隣人や廃線を見

て育った隆司少年は、森林保全と活用こそが町の再生に不可欠だと役場に入って努力を重ねた。環境未来都市下川町のルールを築いた人として知られる。

「厳しい状況の中で森林が村の財政と暮らしを守ってくれた、先人の知恵は凄いです。目の先のことだけに目を向けず、災害などで荒廃した森を60年サイクルで植林・間伐して保全してきました。やっと森林で豊かな収入を得られるようになりましたが、基本は木に囲まれた心豊かな生活を大切にすることです」と春日本部長は言う。

その歩みを記録した膨大な資料をいづれ整理し、山林の多い自治体に提供したいという。そのあと山本さんの案内で、早速各現場へ出かけた。

地元の木材を使った優しい建物に 木質バイオマスボイラー

下川町の主な公共施設や町営住宅は地場産の木材で建設され、室内は木質バイオマスボイラーで暖房している。まず訪ねたのが「幼児センター」。幼稚園 保育園機能を一つに

した施設で、0歳児から6歳までの幼児90人が入所している。

全体には無垢材で建築されているが、壁面はフシがあって優しい質感のカラマツ、床は強度のあるタモ材で床暖房。さらに暖房には木質バイオマスボイラーが導入されている。木の香りと温もりがあふれた室内はミニコンサートも可能な多目的広場を中心に、年齢別にアイデアと工夫に富んだ児童室が配置され、椅子やテーブル等も安全性を配慮した木製。

外には芝生の広い園庭があり、幼児たちは昼食前のひと時を園庭で走りまわっている。隣には真新しい一戸建て住宅が10棟建っている。簡易宿泊施設だそう、自炊から宿泊まですべてが揃っており、長短期滞在で訪れた人が月8万円を利用していているという。

続いて見学させてもらったのが共生型住まいの場「ぬく森」。身の回りのことはほぼ自分でできる高齢者の集住施設で、13人が個室で暮らしている。落ち着いた木の家で給食サービスや介護予防サービスが受けられる。窓辺に花をいっぱい咲かせている新沼みよさんは「冬の寒さも食事心配なく暮らせてとて



▲幼児センター建物と広い庭で遊ぶ幼児たち



▲木の優しさが活かされた共生型住まいの場「ぬく森」



◀「冬も楽しく暮らせます」と花を育てるお年寄り



▲エコハウス美桑の内部2階と外観(下)。玄関へのアプローチもユニーク



▲森の中の天然温泉として人気の五味温泉

も住みよくありがたいです。少しはお役に立ちたいと花を育てているんです」と言う。施設の横には入居者が栽培する花壇があった。

木質バイオマスボイラーは平成16年度に導入した五味温泉の宿泊施設が最初で、次いで幼児センター、育苗施設、役場と周辺施設、高齢者複合施設、町営住宅と導入を拡大してきた。これにより年間約1600万円のコスト削減と900t CO₂の削減効果が生まれているという。コスト削減分は、中学生までの医療費無料化、子育て支援事業、バイオマス施設の整備・更新に充てられている。

我々も五味温泉に宿泊したが、カラマツ材を活かした廊下やレストランは、色濃い森を背景に明るく軽やかで、森林の町にふさわしい公共の宿だった。外に設置してあるボイラー室からは暖房、給湯、温泉加温等の熱量がフル供給されている。

また、木質バイオマス利用が高まる中、町では木質原料を製造する施設も建設している。

大がかりな施設があるのかと思ったが、2人の特殊技術をもつオペレーターが機械操作で原料を積む作業を行っていた。当施設では、近隣から出される河川支障木等を受け入れている。原料は自然乾燥させ、移動チップパー機で粉碎していく。清潔で木の香りに溢れた施設であった。

エコハウスで新しい暮らしを提案

五味温泉の近くにはモデルハウス建築の集大成ともいえる「エコハウス美桑」がある。

地元材を使用して気密性や断熱性にこだわった木造2階建て住宅で、木質バイオマスボイラー導入の他に、地中熱ヒートポンプ、ペレットストーブ、太陽熱発電等のエコ機能が採用されている。これらの機能を取り入れて住民が家を新築又は改装する場合は、町から補助が得られ、例えば地域材利用では最大350万円、木質バイオマス機器では20万円、太陽熱発電では30万円が助成される。

下川町のエコハウスは、グループや大家族が利用できるように建築されているが、夫婦や恋人同士の宿泊利用も可能で、随所に新しい住居のありかたを提案している。まず、玄関前には風雪等を取り除く空間と通路があり、一階玄関を入ると土間風の廊下が広い居間へ通じている。幾つかあるベッドルームも開放して多目的に活用でき、二階には機能的な台所とコンパクトなダイニング、寝室、バスルームとトイレなどが配置されている。間仕切りを外して開放的に、でもプライバシーはしっかり確保された設計である。木質の断熱材を使用し、ガラス窓も三重構造だから、冬もシャツ一枚で過ごせると言う。このエコハウスは、JIA環境住宅賞や日本建築家協会の優良住宅賞を受賞するなど、各界から注目を集めているようだ。厳寒の頃に五味温泉と併せてぜひ利用させてもらいたい。



▲一の橋集落にオープンしたコレクティブハウス



◀バイオマス暖房を配した室内と各戸を繋ぐ廊下



◀育苗ハウスで作業する飯塚、伊藤、今井さん
(右)。下は木質バイオマス温風ボイラー



一の橋集落をエネルギー自給のモデルエリアに

一の橋集落は町の中心部から約15km、クルマで15分ほどの距離だが、林業の衰退、営林署の統廃合により疲弊が進み、137人が暮らす集落だった。高齢化率も52・6%（平成22年）で、そのため冬の除雪や雪下ろし、買い物などの支援体制を整えてきた。

さらに町ではこの集落を次世代コンパクト集落のモデル地区にするために平成22年に地区住民、行政、地区担当職員らで「一の橋地区バイオブレッジ創造研究会」を組織して、地区活性化の取り組みに着手してきた。今年5月に完成オープンしたコレクティブハウス（集住化住宅）22戸は一の橋の住民と町内外からの入所希望者で満室となった。2LDKが中心の木の香りに溢れたモダンな集住化住宅で、当然ながら熱供給として木質バイオマスエネルギーによる温水パネルが各室に設置されている。特徴はすべての戸口をモダンな廊下で繋ぎ、吹雪でも往来が自由に出来ること。また住宅の右手にはコミュニティレスト

ラン、コミュニティスペース、駐車場等があり、レストランでは高齢者に給食サービスもを行っている。

道路沿いにある住民センターには集落整備に関する各種資料が展示され、トドマツの枝葉から抽出された精油や木製品等も展示されていた。木の繊維から成形した巾5〜6cmもある断熱材、これを壁や床に使用すればさぞ暖かいだろうと思った。同センターには警察署の詰所もあり、お巡りさんが定期的に巡回してくるといふ。

エリア内に設置した木質バイオマスボイラー施設を拝見した。シャッターを上げるとトラックで運搬してきた木材のチップをストックさせるコンクリートの巨大なボックスがあり、木のいい匂いがしている。隣室には、チップの燃焼具合や発生した熱量や供給・消費状況が一目で解る機器が2機設置されている。住宅の屋根には太陽パネルも設置されている。

植林用の苗木を育てる

一の橋エリアの北東部、名寄川沿いには、カラマツ、トドマツの苗木を育成するハウスがあり、集落支援員今井宏さんと地域おこし協力隊の飯塚智さんと伊藤蘭さんが働いていた。山に植林する苗木を育苗しており、種から発芽させ、2〜3年経ったものを植樹する。そのために毎年数万本の良質な苗木が必要になる。育苗施設ではハウス内の加温に木質バイオマスを利用しているという。

下川町に17年前にIターンしてエミュー飼育で知られる今井さんは、いまは環境未来都市推進課に所属しながら集落支援の活動のり

▼バイオマスボイラー室。集積したチップと機器を説明する山本さん



ーダーを担っている。今年茨城県から来た飯塚さんは「寒い冬が楽しみです」、伊藤さんは「この町が大好きなので、地域おこし隊の仕事の他に林業関連の仕事をも身につけて住み続けたい」と言っていた。

近くには柳の木が沢山茂っていた。山本さんは「柳は枝から挿し穂を採取でき、成長が早くて優良なエネルギー資源作物になるので、柳を積極的に栽培しています」と語る。

間伐材を100%活用する

下川町の循環型の森林は平成15年に、環境社会、経済に配慮した森林管理が認められて世界的な森林認証「FSC認証」を北海道で初めて取得した。

私たちは間伐した樹木が運搬代が出ないと山に放置されているケースをよく目にするが、下川町では森林組合が有効利用し、付加価値の高い製品を製造している。

小・中径木の間伐材は、くん煙材、木酢液、円柱材、固形炭、精油・化粧品等様々な形で加工・活用されている。くん煙材を加工する森林組合の加工工場を山本さんが案内してくれた。

間伐材を加工してくん煙したものを二つ割りし、寸法に裁断して釘穴を作る。このくん

▶地元産の木材で作った椅子、テーブル、食器等の木工製品。トドマツの精油や化粧品も人気



INFORMATION

- 山口県 山口県農林総合技術センター農業研修部 ☎0835-27-0015 (働)やまぐち農林振興公社 ☎083-924-8900
- 香川県 香川県農業経営課担い手育成グループ ☎087-832-3406 県立農業大学校 ☎087-775-1141 香川県農業生産流通課 ☎087-832-3416
- 徳島県 (働)徳島県農業開発公社 ☎088-621-3083 とくしまアグリテクノスクール・農業学びネット ☎088-621-2427
- 高知県 新規就農研修支援事業 ☎088-821-4512 県立農業大学校・窪川アグリ体験塾 ☎0880-24-0007 高知県農業公社 ☎088-823-8618
- 愛媛県 愛媛県農林水産部農業振興局 ☎089-912-2553 県立農業大学校 ☎089-977-3261 (働)えひめ農林漁業担い手育成公社 ☎089-945-1542
- 福岡県 福岡県農林水産部経営技術支援課 ☎092-643-3495 県立農業大学校 ☎092-925-9129 福岡県農業振興推進機構 ☎092-716-8355
- 大分県 大分県農山漁村・担い手支援課 ☎097-506-3586 (働)大分県農業農村振興公社 ☎097-535-0400 県立農業大学校 ☎0974-22-7581
- 佐賀県 (公)佐賀県農業公社 ☎0952-26-9503 佐賀県生産振興部農業課 ☎0952-25-7272
- 長崎県 (働)長崎県農林水産業担い手育成基金 ☎0957-25-0031 長崎県農業公社 ☎0958-22-9647
- 熊本県 新規就農センター/熊本県農業公社 ☎096-385-2679 農業政策課担い手推進室 ☎096-328-2303
- 鹿児島県 鹿児島県農業農村振興協会 ☎099-213-7223 鹿児島県経営技術課 ☎099-286-3152 農業大学校 ☎099-245-1074
- 宮崎県 宮崎県農業振興公社 ☎0985-51-2631 宮崎県農業担い手支援課 ☎0985-51-2011 農業会議 ☎0985-51-9211
- 沖縄県 沖縄県農林水産部営農推進課 ☎098-866-2280 研修生受入れ/(働)沖縄県農業開発公社 ☎098-882-6801

★新規就農に関する問い合わせや「新・農業人フェア」等の問合せは
 全国農業会議所/全国新規就農相談センター
 ☎03-6910-1133 FAX03-3261-5131
 www.nca.or.jp/Be-farmer
 有機農業参入促進協議会 Yuki-hajimeru.net

田舎暮らしを支援します! NPO法人 ふるさと回帰支援センター

いつかは田舎暮らしがしたい、田舎へ行って短期・長期で農業をしたい、交流したいという人に県市町村主催の田舎暮らしセミナーやワークステイ、体験会等の情報を提供しているのがNPO法人ふるさと回帰支援センター。東京・交通会館内にあるオフィスに関係者が来て説明会を開き、直接相談や質問に答えてくれる。最近では、石川県里山里海で地域活動に参加するワークステイの募集、新潟県小千谷市と交流・定住するためのセミナー、富山県に移住・就職するためのフェア等を開催している。移住した人や就農者から体験談を聞く機会もあり、同センターを通じて田舎暮らしを実現したというケースも多い。
 ふるさと回帰センター/東京都千代田区2-10-1 東京交通会館6F ☎03-6273-4401



▲右/河川支障木等を乾燥してチップに加工する
 左/くん煙した木材は園芸用的人气がある。注文の看板とくん煙板の運搬作業
 ▶トドマツの葉を手に(働)フブの森の田邊代表



煙材は、普通の木材に比べて腐敗しにくく防虫効果もあり、土木や河川関連資材、住宅用や園芸用資材として需要が多い。黒色になった木は落ち着いた風合いで、森や川の自然環

隣棟には、トドマツの枝葉を蒸留して精油を採り、オイルや石鹸に加工、また蒸留後の葉を陰干しして枕を製造する(働)フブの森(アイヌ語でトドマツの意)があり、女性が作業していた。おしゃれな小瓶に入ったオイルや精油は、サッとスプレーするだけで森のオゾンに抱かれた気分になれ、また防虫効果もあるため、私も必ず購入する優れものです。「ここにはすぐそばにフブの森があります。」

に使われたら、街の風景も優しく楽しくなるだろうなと思った。
 境にも融和しそうだ。出来上がった看板の運搬作業に当たった男性は「道路のガードレールなどにもくん煙材を使うといいと思う。車がぶつかっても木がクッションになっても木が死亡事故になりにくいのと思うよ」と言う。くん煙材が各地の子供たちの通学路に使用されたら、街の風景も優しく楽しくなるだろうなと思った。

FSC認定の素晴らしい森です。木を切り出した後に残されたトドマツの枝葉を買い、その生命力に満ちた香りを凝縮しています」と代表の田邊真理恵さんは語っていた。
 森林の間伐作業はクルマで1時間以上の山奥で行われているため、五味温泉先の森へ案内していただいた。数年前に皆伐した森は太陽に溢れトドマツの苗木が元気に育っている。近くには都市住民等が体験・交流に利用する「企業の森」や「体験の森」がある。町ではNPO法人「森の生活」と連携して幼児から高校卒業まで全学年が森林環境教育プログラムの授業に取り入れている。幼いころから木に触れ、森の神秘や厳しさ、楽しさを学習していく。「林業に従事したい若者が多くて対応に困るほど」という噂も、下川町ならあり得ると納得できる取材であった。

文/浅井登美子 写真/小林恵



- 下川町環境未来都市推進本部 ☎01655-4-2511
- 五味温泉 ☎01655-4-3311

全国過疎問題シンポジウム 2013 in ながさき

過疎・離島・半島っていいね！
—本物の価値、コミュニティの知恵、そして誇り—



開催日程

平成25年10月10日(木)～11日(金)

10/10(木) 全体会：佐世保市(アルカス
SASEHO大ホール)

☆過疎地域自立活性化優良事例表彰式・基調
講演・パネルディスカッション

交流会：佐世保市(同 イベントホール)

10/11(金) 分科会

松浦市(松浦市文化会館)

平戸市(平戸文化センター)

西海市(西彼農村環境改善センター)

新上五島市(鯨濱館ホール)

☆松浦市、平戸市会場にてパネルディスカッ
ション、西海市、新上五島町にて優良事例
発表会を実施予定。現地視察もあります。

全国過疎問題シンポジウム実行委員会事務局
長崎県企画振興部地域振興課

☎095-895-2247 fax095-823-4166

編集後記

▼この夏、日本列島は猛暑豪雨の天変。かつて経験したことがないような大雨が襲い、被害続出。農作物に多大な影響を与えているのではないかと取材した地域や人々を思い出して心が痛んだ。ゲリラ豪雨は予測が困難なバックビルディング現象というから、農作物を守るには施設栽培や排水路等の整備がさらに必要になるのだろう。

▼今回の取材では沢山の専門知識と農業の厳しさ、楽しさ等を学ぶことが出来た。新規就農者を受け入れる側の支援体制と熱意のボールは、ニューファーマーにしっかりキャッチされて、逞しい地域農業の担い手が育っている。捕手役の奥さんの力も凄い。一方で農業が好き、農業が現代社会に必要なだと個人的に山村に移住した方々は、切磋琢磨しながら自家栽培した物を加工して付加価値を付ける、都市に直売する等、従来の農家でない発想で農業の大切さや可能性を発信している。皆なんと魅力的か!! それを本誌はぜひ伝えたい。(A)

De POLA No.43

[でぼら] 2013年

発行日/平成25年10月5日

発行所/全国過疎地域自立促進連盟

〒105-0001 東京都港区虎ノ門一丁目13番5号
第一天徳ビル3階

☎03-3580-3070 FAX03-3580-3602

<http://www.kaso-net.or.jp/>

編集/谷編集工房アド・エー

各県の主な新規就農者の支援事業の窓口

■北海道 (公財)北海道農業公社、北海道農業
担い手育成センター ☎0570-044-055

東京・大阪・札幌で就農相談会・セミナー開催、
2泊3日の農業体験視察会実施

■青森県 (公社)あおもり農林業支援センター
☎017-773-3131 フレッシュファーマー

ズ就農定着・経営安定化支援活動(地域で就
農後のサポート) 青森県構造政策課 ☎017-
734-9463

■岩手県 岩手県農林水産部農業普及技術
課 ☎019-629-5656 農業公社就農支援

課 ☎019-623-9390 岩手県農業会議 ☎
019-626-8545 県立農業大学校 ☎019-
743-2107

■宮城県 宮城県農林水産部農業振興課 ☎
022-211-2836 ニューファーマーズカレ

ッジ・農業大学校 ☎022-383-8138 みや
ぎ農業未来塾、あぶくま農業校「土の塾」 ☎
0244-63-2328

■秋田県 秋田県農業研修センター ☎
018-545-3113 秋田県農林政策課 ☎

018-860-1726 (社)秋田県農業公社 ☎
018-893-6212

■山形県 農政企画課農業経営支援室 ☎
023-630-2428 県立農業大学校 ☎023-
322-1527、(公財)やまがた農業支援セン

ター ☎023-641-1117

■福島県 新規就農ステップアップ支援事
業(財)福島県農業振興公社 ☎024-521-
9848 農業短期大学校 ☎024-842-
4114

■群馬県 群馬県農政課(群馬県農業公社)
☎027-251-1220 群馬県技術支援課 ☎

027-226-3064 県立農林大学校 ☎027-
371-3244

■茨城県 ニューファーマー育成研修助成事
業/(公財)茨城県農林振興公社 ☎029-239-
7131 いばらぎ営農塾・定年帰農塾/県立農

業大学校 ☎029-292-0010

■栃木県 新規就農定着支援事業/栃木県経
営技術課 ☎028-623-2317 就農準備・

農業未来塾/県立農業大学校 ☎028-667-
4944

■埼玉県 農業支援課 ☎048-830-4051
(社)農林公社 ☎048-558-3555

■千葉県 担い手育成課 ☎043-223-2904
千葉県水産振興公社 ☎043-222-9136

■山梨県 (財)山梨県農業振興公社 ☎055-
223-5747 職業訓練農業科就農研修他/県

立農業大学校 ☎055-132-2269

■長野県 長野県農政部農村振興課/里親活
動支援 ☎026-235-7243 農政課担い手担

当 ☎026-334-3222

■岐阜県 新規就農・就農促進事業 ☎058-
272-8421 (社)岐阜県農畜産公社 ☎058-
276-4601

■新潟県 新潟県経営普及課 ☎025-280-
5300 (社)農業公社青年農業者育成セン

ター ☎025-281-348 農業大学校 ☎025-
672-3141

■石川県 いしかわ耕稼塾・就農者育成研
修 (財)いしかわ農業人材機構 ☎076-225-
7621

■富山県 富山県農林水産部農業経営課 ☎
076-444-9623 新規就農・とやま農業未
来塾/富山県農林水産公社 ☎076-441-
7396

■福井県 福井県園芸畜産課担い手・企業化
支援グループ ☎0776-20-0433 福井アグ

リスクール/ふくい農林水産支援センター ☎
0776-21-5475

■静岡県 がんばる新農業人支援/県経済産
業部農林局農業振興課 ☎054-221-2754

農業振興公社 ☎054-250-8991 県立農
林大学校 ☎053-836-1561

■愛知県 愛知県農業経営課 ☎052-954-
6412 農業振興課 ☎052-954-6406 県

立農業大学校 ☎056-451-1034

■三重県 三重県農林水産支援センター
☎0598-48-1226 県立農業大学校 ☎
0598-42-1260

■和歌山県 あぐりチャレンジャー推進事業/
和歌山県経営支援課 ☎073-441-2934

和歌山県農業公社 ☎073-433-5547

■奈良県 奈良県農林部地域農政課 ☎
0742-27-7617 (財)農業振興公社 ☎
0742-23-6148

■京都府 あぐり京都ネット/京都府農業会議
☎075-441-3660 (公社)京都府農業総合
支援センター ☎075-417-6847

■滋賀県 滋賀県就農相談センター ☎
077-523-5505 (公)滋賀県農林漁業担い
手育成基金 ☎077-523-5505

■兵庫県 兵庫みどり公社 ☎078-361-
8114 兵庫県農業経営課 ☎078-341-
7711 ふるさとカムバック農業塾/農業改

良課 ☎078-341-7711 農業振興局農政
部 ☎078-322-5351

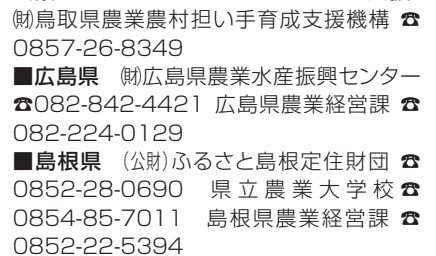
■岡山県 岡山県農林漁業担い手育成財
団 ☎086-226-7423 岡山県農業会議 ☎
086-234-1093 岡山県農林水産部農産

課 ☎086-226-7420

■鳥取県 農の雇用・就農研修支援/農業
会議 ☎0857-26-7261 IUJアグリ支援/
(財)鳥取県農業農村担い手育成支援機構 ☎
0857-26-8349

■広島県 (財)広島県農業水産振興センタ
ー ☎082-842-4421 広島県農業経営課 ☎
082-224-0129

■島根県 (公財)ふるさと島根定住財団 ☎
0852-28-0690 県立農業大学校 ☎
0854-85-7011 島根県農業経営課 ☎
0852-22-5394



大分県豊後大野市インキュベーションファーム。
研修生と指導員

草の声、水の声、
風のささやきを聴きに――
森の妖精たちに出会う。



標高1500mの高地の初夏を告げる、幻の花「ヒマラヤの青いケシ」。中村夫妻が20年間かけて5000株が咲くケシの花園を作った(大鹿村)



豪雪の冬を乗り越えた名水の森「竜ヶ窪」は野生植物や生き物の宝庫。河岸段丘の中には森の妖精と出会えるスポットが幾つもある(津南町)